

用竹（殿村）遺跡

県道上野原五日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

上野原町教育委員会

用竹（殿村）遺跡

県道上野原五日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

上野原町教育委員会

序

用竹（殿村）地区は日本一の長寿村桐原にある一集落である。桐原の耕作地の多くは南面に傾斜し、場所によつては「耕して犬に到る」ようなところもあるが、ここ用竹（殿村）地区は最も平坦で豊饒な土地である。遺跡を抉むような形で二つの沢が流れ、いまは遺跡との落差60メートルあまりの鶴川の清流も、かつては手に取れるような近くを流れいたであらう。周囲には広大な樹林があり、川幸・山幸が豊かで、日々快適な生活を送る環境条件は絶て整つてゐた。

用竹の地名の由来は「往古此部落大竹林ありしより此名あり、而して、晝間虎來りてここに遊び夜は小伏（地名にして又虎伏とも書せり）に歸れりと傳ふ。」と北都留郡誌にあるが、良質の竹を多く産し矢竹に用いられていたことに因るとの説もある。虎が夜伏したといわれる小伏（虎伏）にも、神庭遺跡がある。両遺跡とこの地名由来にはなんの因果関係も関連もあるわけではないが、縄文人たちの交流往来は頻繁にあったと思われる。学術報告書に不向きであるが、小伏に生を受けた私にとって、この地名にまつわる虎往来と遺跡往来が相互に絡み合つて、なんとはなしの楽しい空想のひとときに浸ることができる。

今回の発掘は「県道上野原五日市道路改良工事」に伴うものである。耕作によって上器破片が表出し、遺跡の存在そのものは古くから知られていたが、長期間にわたる農耕から、発掘成果の期待は今一つの感なきにしもであったが、縄文人の食生活を知る上で鹿の骨の発見という貴重な資料が得られたことは特筆すべきことであらう。

終わりにあたり、発掘にあつた多くの方々のご苦労にお礼申し上げ序とします。

1998. 3

上野原町教育委員会

教育長 遠藤 諦三

例 言

1. 本書は、山梨県北都留郡上野原町桐原字用竹地内の用竹（殿村）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県道上野原五日市線道路改良工事に伴う事前調査で、山梨県人月土木事務所の委託を受けて実施された。
3. 発掘調査は上野原町教育委員会が実施した。その組織はつぎのとおりである。

事務局 教育長 遠藤謙三

社会教育課長 久島 啓（平成8年9月まで）・水越辰巳（平成8年10月から）

社会教育課長補佐 高橋武久（平成8年10月から）

社会教育係長 片伊木卓男（平成8年9月まで）

担当者 社会教育係主任 小西直樹

参加者 網野一、網野広明、網野君子、安藤光子、長田貞夫、小俣時代、片伊木まち子、片伊木由香、上條笑子、古根村典子、杉本富子、杉本良江、築地文博、富田寛、富山敬子

4. 動物遺存体の分析は、新美倫子氏（名古屋大学大学院人間情報学研究科）に依頼した。また、炭化材の樹種同定およびC14年代測定を、パリノサーヴェイ株式会社に委託した。それぞれの分析結果は付録に示した。
5. 本書の執筆・編集は、小西直樹が行った。

6. 発掘調査から本書の作成までを通して、つぎの方々のご教示・ご協力をいただいた。感謝申しあげます。

小野正文（山梨県学術文化財課）、新津健（山梨県立埋蔵文化財センター）、奈良泰史（都留市教育委員会）、杉本正文（大月市教育委員会）、新美倫子（名古屋大学）、中井均（都留文科大学）

敬省略・順不同

7. 遺跡の名称について付記する。用竹（殿村）遺跡は、大字用竹・小字殿村に位置することから名付けられたものであり、（殿村）は用竹の別称ではない。用竹には他に用竹（神戸）遺跡があり、（ ）内の名称を用竹と取り違えてしまうと、違う遺跡を呼称してしまうことになりかねない。のことから本書の遺跡名は、（ ）を外して、例えば用竹殿村遺跡とした方が良いのかもしれないが、これまでの一貫性を考えて本書では從来どおりの名称とした。

8. 本書にかかる出土品・記録図面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。

凡 例

1. 遺構の縮尺はつぎのとおり。1号集石・1号焼土、1／30。2号焼土・埋設土器、1／20。
2. 遺物の縮尺は1／3を基本としたが、小型石器は2／3。
3. 遺構図の水系高は海拔高を示す。
4. 遺物実測図・拓本図中のアルファベットは、出土区を示す。

目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 周辺の遺跡	3
第Ⅲ章 調査の方法と経過	5
第Ⅳ章 遺跡の層序	6
第Ⅴ章 調査の成果	8
第1節 遺構	8
第2節 土器	15
第3節 土製品	36
第4節 石器	37
第VI章 まとめ	47
附 編1 用竹(殿村) 遺跡から出土した炭化材の年代と樹種	52
パリノ・サーヴェイ株式会社	
2 用竹(殿村) 遺跡出土の動物遺体	55
新美倫子(名古屋大学大学院人間情報学研究科)	

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡分布	2
第3図 遺跡周辺の地形	4
第4図 調査区の配置	5
第5図 遺跡の層序	6
第6図 遺構全体図	7
第7図 1号集石と1号焼土	9
第8図 2号焼土	9
第9図 集石・埋設土器出上遺物	9
第10図 埋設土器(1)	9
第11図 埋設土器(2)	10
第12図 遺物集中部の上器分布状況	12
第13図 遺物集中部の遺構分布状況	13
第14図 遺物集中部の土器接合状況	14

第15図～第33図 出土土器	15～35
第34図 土製品	36
第35図～第41図 出土石器	39～45
第42図 土器分布図	49
第43図 土器接合関係	50
第44図 石器分布図	51

表目次

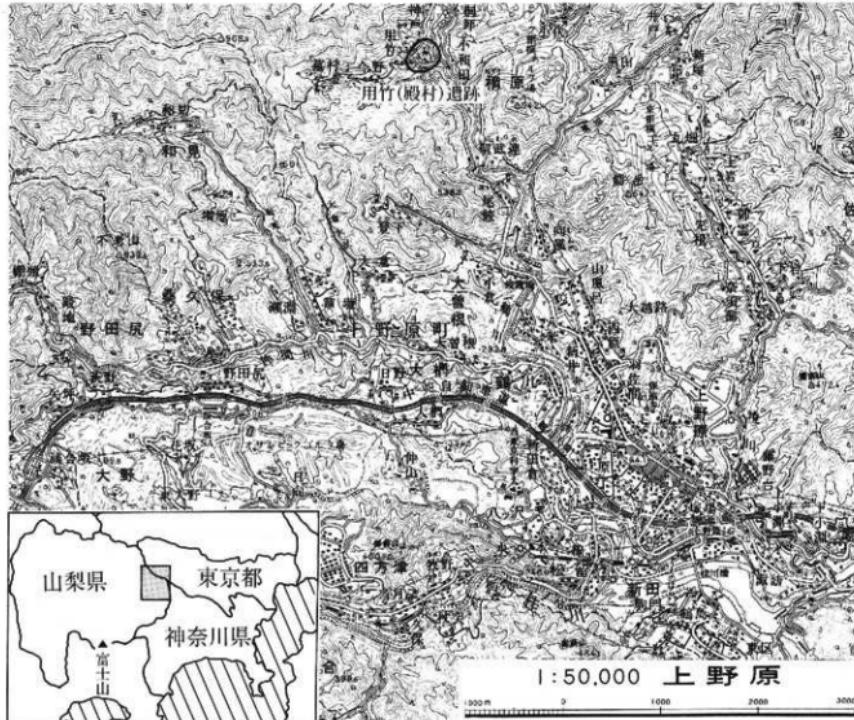
第1表～第2表 石器観察表	45～46
---------------	-------

写真図版

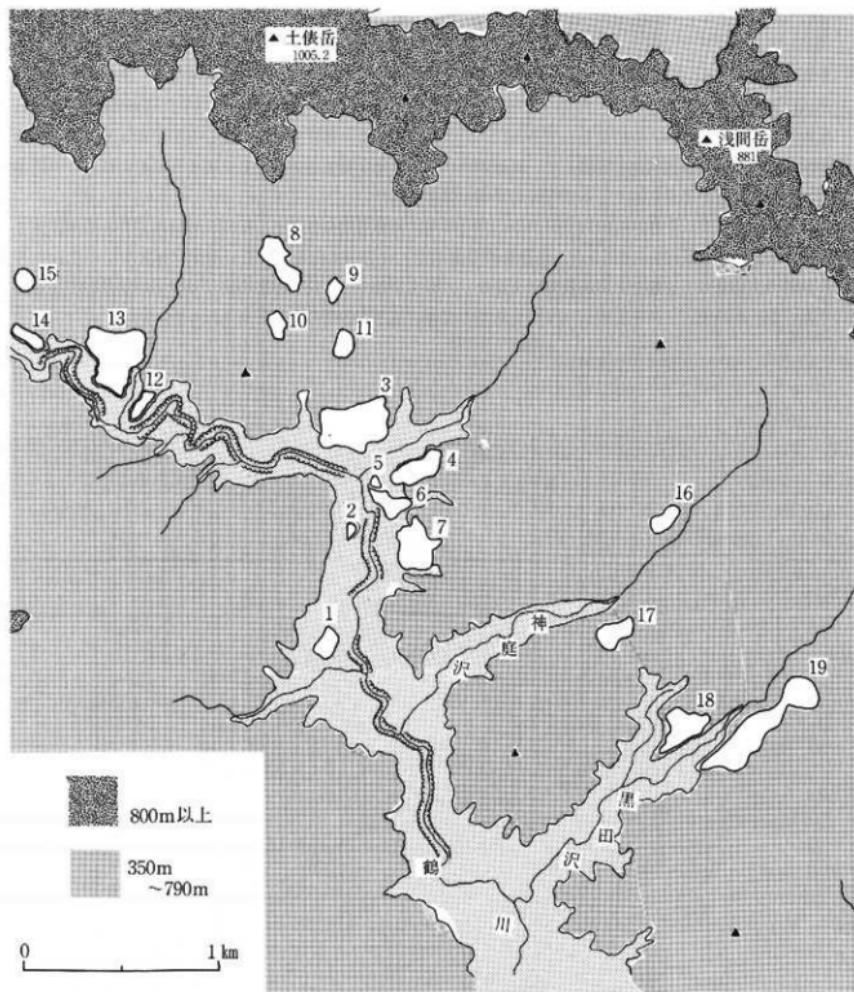
第Ⅰ章 調査にいたる経緯

平成6年9月9日、山梨県大月土木事務所から文化庁宛てに県道上野原五日市線道路改良工事に伴う発掘通知が提出された。工事計画では、用竹(殿村)遺跡の西縁を通過している現在の県道を、延長150mにわたって拡幅、および一部付替えを行うものであった。このため、上野原町教育委員会は、工事予定区域において遺跡範囲確認のための試掘調査を実施した。試掘調査は、山梨県学術文化財課立会いのもとで行われ、この結果、一部で縄文式土器が多量に出土し本調査の必要性が確認された。

平成7年10月25日、上野原町教育委員会から文化庁宛てに発掘通知を出し、平成7年11月27日から本調査に着手した。調査面積は160m²。調査は、他遺跡の発掘調査と並行して行われたため順調に進まなかった。さらに厳冬期の土壌凍結・予想を上回る遺物出土量などで時間を費やし、現場作業の終了は翌年の平成8年2月9日であった。その後、2カ年にわたって出土品等の整理、及び報告書の作成作業を行った。



第1図 遺跡の位置



- | | | | | | |
|-------------|-----------|-------------|--------|------------|----------|
| 1 用竹（殿村）遺跡 | 縄文早・中～晩期 | 2 用竹（神ノ下）遺跡 | 弥生 | 3 猪丸遺跡 | 縄文前・中・後期 |
| 4 椿和田原遺跡 | 縄文中期 | 5 桐原中学校遺跡 | 縄文晩期 | 6 下柳遺跡 | 縄文後期 |
| 7 横坪遺跡 | 縄文中期 | 8 大久保耕地遺跡 | 縄文晩期 | 9 神昌（中峰）遺跡 | 縄文中期 |
| 10 チューダケ遺跡 | 縄文・古墳時代 | 11 日原本光寺遺跡 | 平安 | 12 寺尾遺跡 | 縄文早・中期 |
| 13 大垣外遺跡 | 縄文中期 | 14 沢渡Ⅱ遺跡 | 縄文中期 | 15 沢渡Ⅰ遺跡 | 縄文 |
| 16 小伏（神庭）遺跡 | 縄文中期・古墳時代 | 17 小伏（沢渡）遺跡 | 縄文早～晩期 | 18 黒田東遺跡 | 縄文中期 |
| 19 新屋原遺跡 | 縄文早～中期 | | | | |

第2図 周辺の遺跡分布 (1/25000)

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

第1節 遺跡の位置

用竹（殿村）遺跡は、山梨県北都留郡上野原町桐原に位置する。上野原町桐原は山梨県東端の山間地に位置し、北から東方にかけて東京都境の山脈（標高850～1000m）を望むことができる。現在の桐原集落は、桂川の支流沿いに点在する小規模な河岸段丘面や山の緩斜面に散在しており、山ふところにいたかれたのどかな風景が残っている。しかし、近年はゴルフ場の造成や、東京都檜原村とを結ぶ甲武トンネルの開通などといった開発が見られ、少しずつ地域の様相は変貌している。

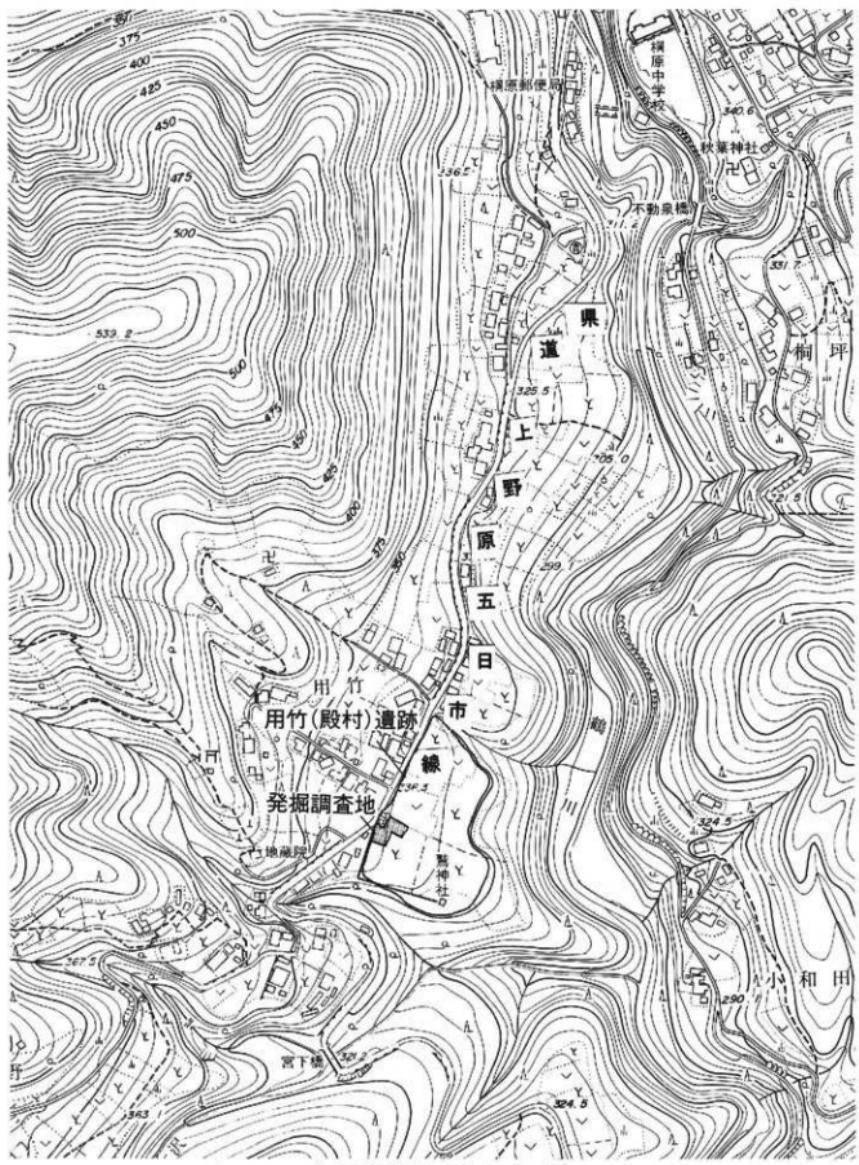
用竹（殿村）遺跡は、桂川支流の鶴川西岸に沿って約700m続く段丘面に位置する。この段丘は、鶴川から派生する谷によって3つに分割され、このうち最も南側の段丘面に本遺跡が位置している。本遺跡の範囲は、主に畠として利用されている緩斜面を中心とし、段丘背後の山裾を通過する県道上野原五日市線付近が西限と見られている。今回の調査地点は段丘面南端にあたり、明神沢と呼ばれる急激に落ち込む谷から約30m北側の緩斜面に位置する。調査地点の標高は約330mで、鶴川との比高差は約60mである。調査前は畠として利用されていた。なお、今回調査地点の近隣で、農道工事中に縄文中期から晩期にかけての土器出土が報告されている（1984長谷川）。この中には晩期の清水天王式土器が含まれる。

第2節 周辺の遺跡

用竹（殿村）遺跡の位置する上野原町桐原における遺跡は、河川沿いで多く確認されている。とくに縄文時代遺跡の分布域は、鶴川流域、および鶴川から都県境に向かって北東方向に伸びる支流沿いの2地域に大別することができる（第2図）。

鶴川流域の縄文遺跡は、用竹（殿村）遺跡を含めて15遺跡があり、町内において遺跡分布密度の濃い地域の一つである。用竹（殿村）遺跡を除いて発掘調査例が無いため詳細は不明だが、桐原中学校遺跡（5）では、校舎の敷地造成時に縄文後期から晩期にかけての土器や敷石遺構等が発見されている。用竹（殿村）遺跡との関連が最も注目される遺跡であるが、残念ながら当時の記録はほとんど残されていない。

鶴川東側の支流沿いでは、神庭沢沿いに2遺跡、黒田沢沿いに2遺跡の計4遺跡がある。このうち2遺跡で発掘調査例がある。小伏（穴沢）遺跡（17）は、神庭沢と黒田沢の分水嶺にあたる。土器・石器が遺構外から多量に出土している。土器は、縄文早期から前期を主体に中・後・晩期まであり、石器は、黒耀石・チャートの剥片や磨石類・凹石が多い。遺構は、陥し穴状土坑や焼土址などがある。新屋原遺跡（19）は、黒田沢沿いの河岸段丘面にあたり、縄文早期末から前期前半の竪穴住居址2軒、竪穴状遺構、ピット列、陥し穴状土坑、炉穴、焼土址、集石などが調査された。穴沢・新屋原遺跡とも縄文早期後半から前期を主体としている。



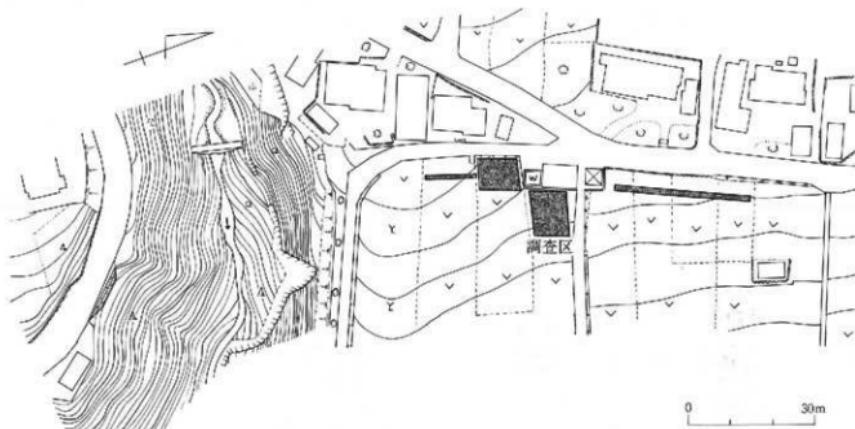
第3図 遺跡周辺の地形 (1/5000)

第Ⅲ章 調査の方法と経過

試掘調査の結果に基づき、道路予定地の約80m²を本調査区とした。しかし、調査着手後、道路改良に伴う消防庫の移設が具体化し、その移設先約80m²の調査も必要となった。このため、本調査区は近接する2区に分かれることになり、当初の調査区をA区、消防庫移設予定地をB区とした。そして、A区の調査終了後、A区を排土置場にする形でB区の本調査を実施した（第4図）。

調査は、表土を重機で掘削した後、遺構・遺物を確認しながらすべて人力で掘り下げた。とくに第Ⅱ層中は遺物が多量に含まれるため、イショクコテで掘り下げながら遺物を検出した。遺物は原則として出土位置の平面・標高を計測して取り上げた。しかし、B区北東側の一部では担当者の指示ミスで、出土位置を記録せずに取り上げてしまったものもあり、この中には縄文時代晚期後半の黒色磨研の上器などが含まれていた。

第Ⅳ層上面を検出した段階で試掘溝を設定、ローム層上面まで掘り下げたが、遺構・遺物が確認されなかつたため第Ⅳ層上面で調査を終了した。



第4図 調査区の配置

第Ⅳ章 遺跡の層序

今回の調査で土層を概ね5層まで確認した。ローム層上面までの深さは約150cmである。全体に東方に向かって緩やかに傾斜している。土層は全般に1cm以下的小礫を多量に含む他、礫層が部分的に介在しており、西側の山裾から土石流が断続的に発生していたことがうかがえる。

第Ⅰ層 表土（耕作土）。大正年間の貨幣が出土している。

第Ⅱ層 暗褐色土。縄文土器を多量に含む遺物包含層で、A・B区ともに見られた。1cm以下的小礫を多量、3~4cm大の礫をやや多く含む。2層に分けられる。

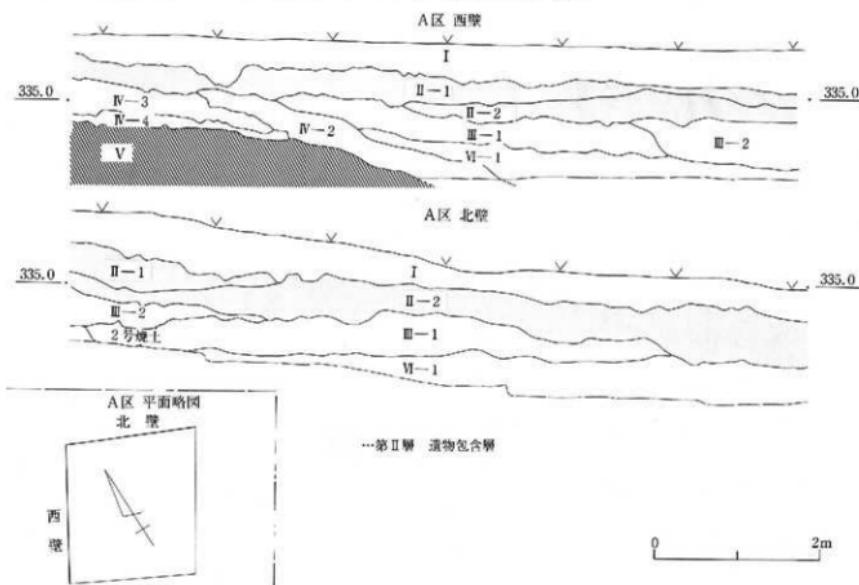
II-1層 褐色味が強い。炭化物を多量に含む。焼土粒を少量含む。

II-2層 炭化物・焼土粒を少量含む。

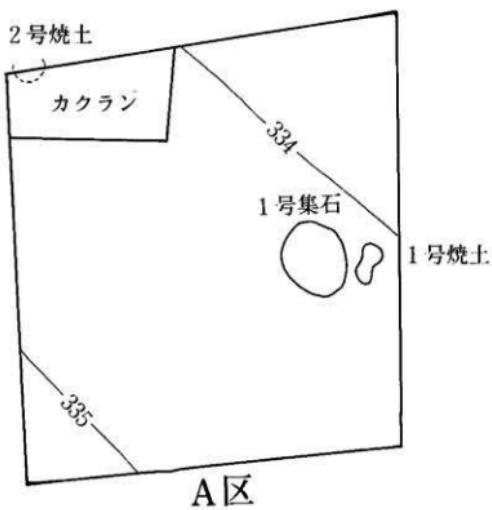
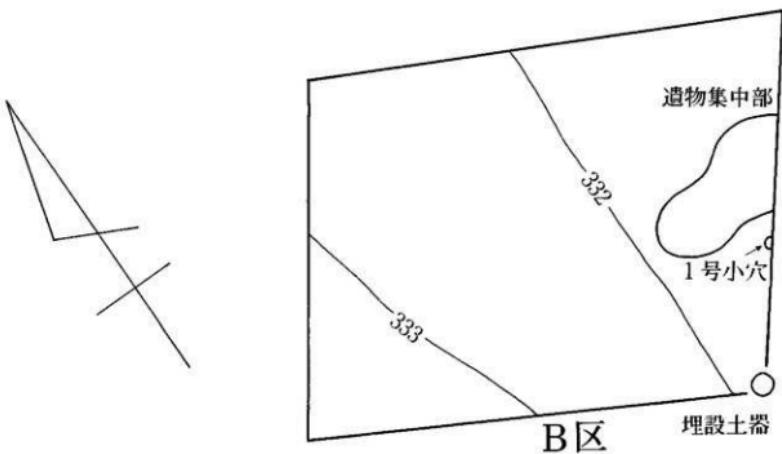
第Ⅲ層 暗褐色土。A区で見られ、斜面下方のB区では見られない。1cm以下的小礫が非常に多く含まれ、3~4cm大の礫も多量に含まれる。橙色スコリア（1~3mm大）を多量に含む。縄文土器が少量含まれる。

第Ⅳ層 褐色土。締まりが強い。1cm以下的小礫を多量に含む。橙色スコリア（1~3mm大）をやや多く含む。遺物は含まれない。本層は礫の含有量で4層に細分することができた。とくに5cm大の礫を主体とする礫層がA区の一部で見られた。

第Ⅴ層 橙褐色土。ローム層に相当する。1cm以下的小礫を多量に含む。



第5図 遺跡の層序



0 5m

第6図 遺構全体図

第V章 調査の成果

第1節 遺構

調査の結果、縄文時代の集石1基、焼土2基、埋設土器1基の他、ピット・焼土を伴う遺物集中部が1か所で確認されている。大半は縄文時代後期に属するものと考えられるが、遺物集中部は中期から晩期にかけての遺物が出土している。遺構の分布は、1号集石と1号焼土はA区遺物分布域の南限に集中している。他の遺構は遺物分布域と重なっており、2号焼土がA区北側、埋設土器・遺物集中部がB区西側に偏在している。遺構の確認面はII-2層である（第6図）。

1号集石（第7図、図版2）

A区II層で確認された。遺物分布域の南限にあたる。本集石南側に近接して1号焼土がある。平面は長軸170cm、短軸140cmの楕円形を呈する。掘り込みは深さ20cmで、断面は皿状を呈する。環は掘り込み内にドーナツ状に分布しており、中心部は希薄となる。拳大の破碎礫が多く、大半は被熱のためか淡い褐色を呈し、ひび割れが目立つ。さらに吸炭が見られるものもある。また、集石南側に近接して30cm大的大型環が出土している。覆土中に焼土や炭化物は見られない。遺物は、確認面で土器細片4点・黒曜石剥片2点が出土している。土器は縄文時代後期に比定される。

1号焼土（第7図、図版2）

A区II層で確認された。1号集石南側に近接する。平面は長軸88cm、短軸35cmの不整楕円形を呈する。掘り込みは深さ20cmで、断面は皿状を呈する。覆土は2層に分けられ、上層に焼土粒を多量に含んでいる。遺物は、確認面で焼けた破碎礫2点・土器細片2点・黒曜石剥片2点、覆土下層で破碎礫1点・土器細片3点が出土した。土器は縄文時代後期に比定される。本遺構の南側70cmにも小さな焼土が確認された。平面は直径10cmの円形で、掘り込みは無い。これらの焼土と1号集石は同レベルの確認面で近接している。さらに、黒曜石の剥片が各遺構を中心に総計7点と周間に比べて集中して検出されていることから、相互に関連があるものと推定できる。

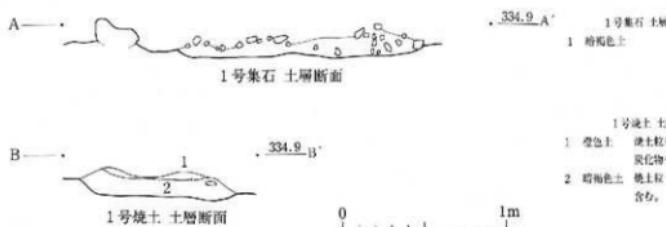
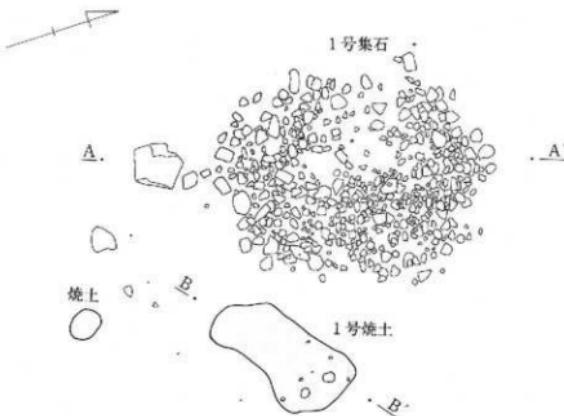
2号焼土（第8図）

A区北壁の断面で確認された。周囲を大きく搅乱されており、平面形や規模は不明である。III-2層直下から掘りこまれている。壁断面での長さは90cm、深さは30cmを計る。掘り込みの断面形は皿状を呈する。覆土は1層で、焼土粒をやや多く含む暗褐色土である。壁面の一部は焼けて、赤色に硬化している。また底面の一部には厚さ2cmの焼土層が確認され、その直上に厚さ2cm程度の炭化物層が堆積している。出土遺物は無い。

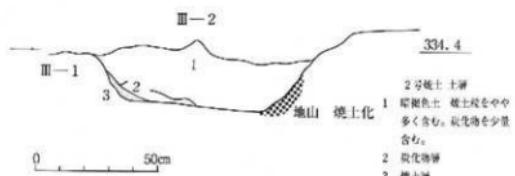
なお、III-2層は2号焼土の周囲にのみ認められることから、III-2層を覆土とする堅穴状遺構が存在し、本遺構に2号焼土が伴っていた可能性もある。III-2層中からは炭化物がやや多く出土しているが、土器は少なく、本層上面とII-2層との境界付近で後期の土器が少量出土している程度である。

埋設土器（第9・10・11図・図版4）

B区南端、II-2層中で確認された。深鉢が正位に埋設され、口縁部の一部と胴下位を欠いている。掘り方は明確に確認できなかった。上器の内面下位から深鉢口縁部1点が出土している。



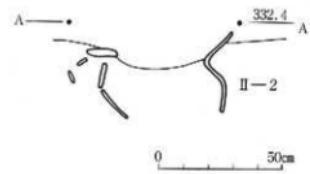
第7図 1号集石と1号焼土



第8図 2号焼土



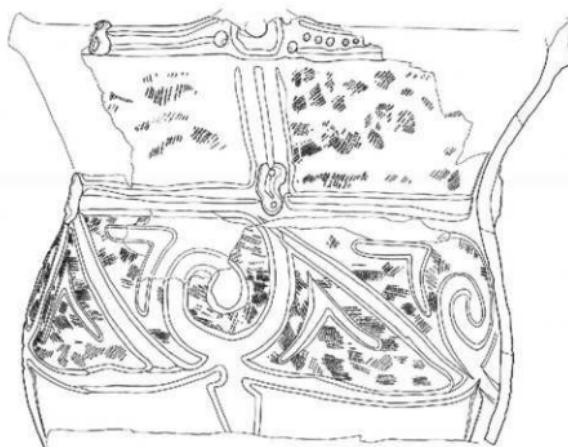
第9図 集石・埋設土器出土遺物



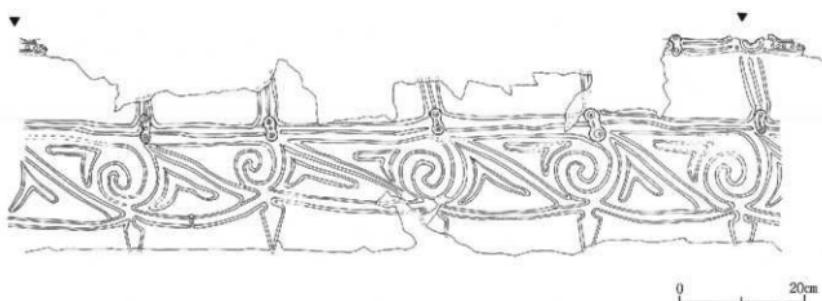
第10図 埋設土器(1)

土 器 (第11図、図版4)

推定口径50.0cm、残存高36.0cm。口縁部の3/4、および胴部下位が欠損する。口縁部は5単位の小波状を呈するものと思われる。波頂部に貫通孔がある。口縁部に沈線・円形刺突文・8字状貼付文が施される。波頂部から3本単位の沈線が垂下し、頸部をめぐる3本単位の沈線と合流する。この合流部に8字状貼付文が付く。胴部には平行沈線によるJ字状もしくは渦巻き状の文様が当間隔で配され、その直下には劍先状の文様が施される。また、渦巻き状の文様間に斜位・弧状の沈線がつないでおり、「人」字状・「て」字状の平行沈線文が配される。地文は、口縁部から胴部にかけて繩文が施される。器面はやや荒れ、胴下半部には吸炭範囲が帯状にめぐる。胎土に白色砂粒を含む。色調はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良い。堀之内1式に比定される。



0 10cm



0 20cm

第11図 墳設土器(2)

遺物集中部（第12～14図、図版3）

B区南側、II-2層中で1ヶ所確認された。東側の一部は未調査区にかかる。長軸4m・短軸2m程度の範囲に多量の土器破片や小砾が密集する他、多量の黒耀石剥片、焼けた獸骨、炭化材も含まれている。石器も含まれ、45cm大的の平たい河原石と磨石（64）がセットで出土している。本集中部は周囲に拡散しながら遺物包含層に連続しており、明確な平面プランや掘り込みは確認できなかった。遺物の垂直分布は最大40cmの巾があるが、概して20cm程度の巾に集中している。

土器は大半が細片であった。とくに塊状（直徑50～100cm）に密集した箇所が3か所に分散し、それぞれ意識的に寄せ集められた様子が認められる。土器の接合関係は集中部内で完結するものが大半だが、232は集中部の外側390cmの距離で接合し、さらに接合はしないが232と同一個体と考えられる破片が埋設土器内部から出土しており、埋設土器と遺物集中部との関連を知るうえで興味深い。土器の時期は、縄文時代中期中葉から晚期後半に属するものであるが、中期の土器は数点であり、主体は後期から晚期に比定できる。石器は6点を確認した。磨石類が多く、被熱や吸炭が認められるものが多い。

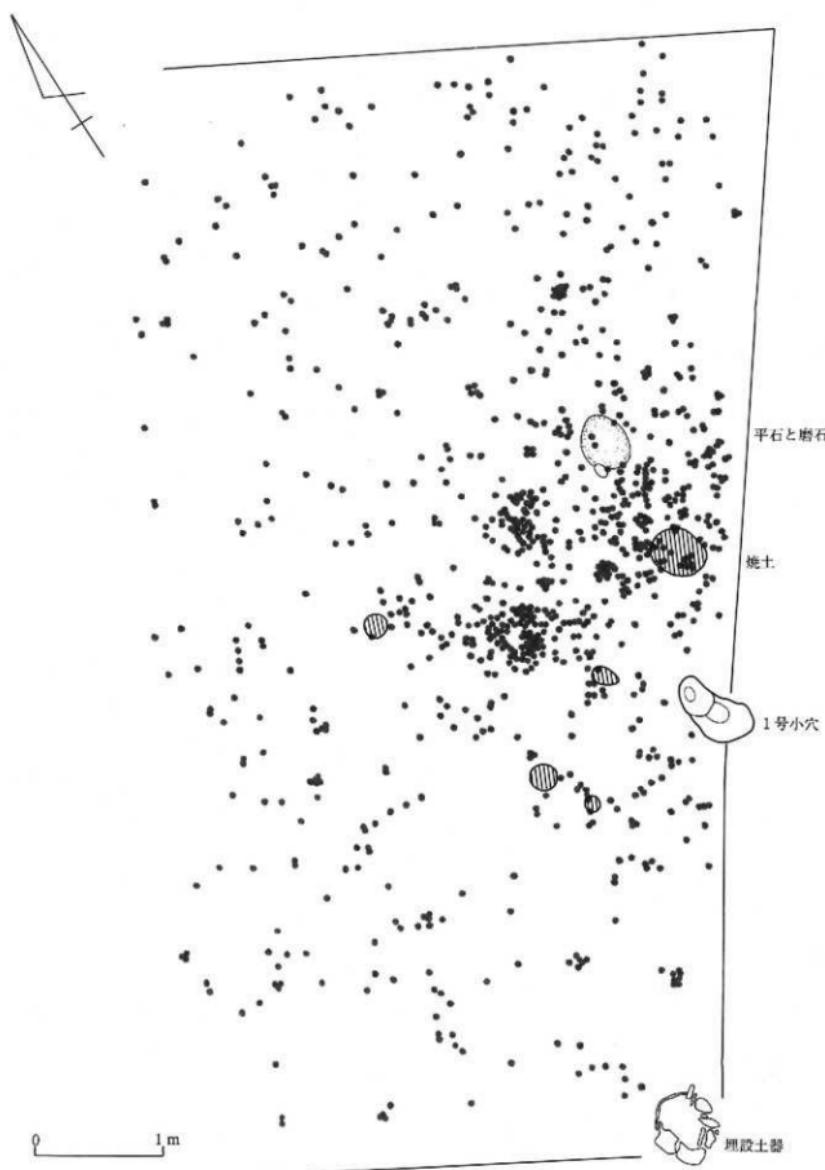
骨は大半が細片である。遺物集中部から周囲約2mの範囲にまで散在していた。垂直分布は、土器集中範囲の上位から下位まで認められるが、概して土器集中範囲の最下位に位置し、粗密なく一様に分布している。大半はシカの焼骨であった。炭化材は大半が細片であるが、長さ5cmの炭化材2点が平石周囲で検出されている。この2点について樹種同定とC14年代測定を委託したところ、樹種はいずれも落葉広葉樹のトネリコ属で、年代は2960y.b.pと3030y.b.pという結果を得た（附篇参照）。

本集中部は焼土5か所、小穴1基を伴っている。東端の焼土は、本集中部と重複するが、他は本集中部の南側外縁に位置する。東端の焼土は、平面が40cm×35cmの楕円形を呈するが、他の焼土は、平面が10cm～20cmの円形を呈している。いずれも掘り込みは無く、やわらかい焼土純層が薄く堆積するが、東端の焼土を除き、焼土直下に灰層が薄く検出されている。焼土からは土器の細片や、被熱・吸炭を受けた磨石や小砾、黒耀石の微片が検出されている。小穴は、平面が長軸66cm・短軸32cmの不整楕円形を呈し、最深60cmを計る。中位で段差がみられ、最深部は遺物集中部側に寄っている。

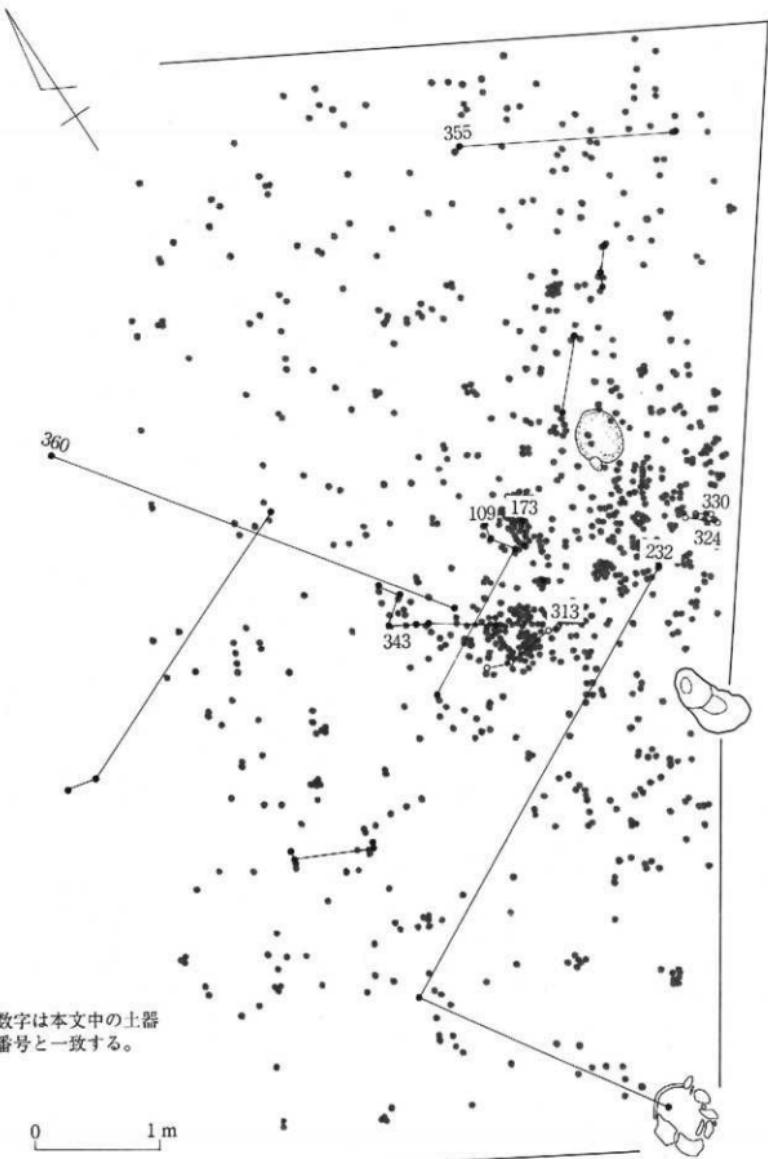
出土遺物には後期堀之内式（109、232）、晚期清水天王山式（313）、安行3b式（324）、晚期後半（330）、無文深鉢（343）などがある。土製品は、土製円盤1点が出土している（6）。石器は、打製石斧（32）、磨石類（46、64、66）、凹石（69）などがある。



第12図 遺物集中部の土器・骨分布状況



第13図 遺物集中部の遺構分布状況



第14図 遺物集中部の土器接合状況

第2節 土器

今回の調査で土器が約2000点出土した。土師器・須恵器の細片が数点出土した他は、すべて縄文式土器である。遺物集中部、および造構外出土が大半であり、造構出土の土器は数点に過ぎない。分布は、A区北半部からB区全域にかけて見られ、A区南半部、すなわち斜面上方ではまったく出土していない。遺物包含層である第II層中からの出土が多い。大半が破片で、接合関係はA・B区にまたがって広範囲に散らばるものや、接合範囲が狭く1か所にまとまるものがある。とくに1か所にまとまるものはある程度復元できるものが多いが、それでも完全な形に復元できるものはない。時期は縄文時代中期中葉から晩期後半まで見られるが、主体となるのは後期前葉である。本書では376点の縄文式土器を報告し、つぎのように分類した。

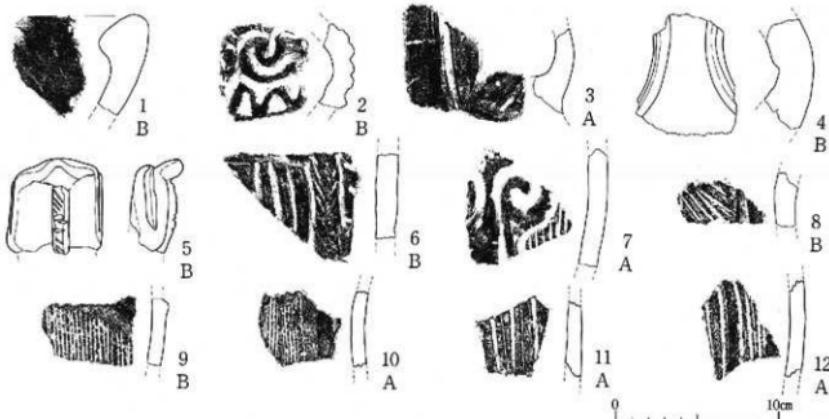
第1群 縄文時代中期中葉							
第2群 中期後葉							
第3群 中期末葉	第1類 曽利V式 第2類 加曾利EIV式						
第4群 後期前葉	第1類 斧形縄文 第2類 平行沈線間に列点文 第3類 沈線主体の深鉢 第4類 縄文地に沈線が描かれる深鉢 第5類 脚部が球状に張る深鉢で、脚部に主文様をもつ。 第6類 第3類から第5類の口縁部			第7類 直線的な唇沿縄文が施される深鉢 第8類 沈線が横位に施される 第9類 注口土器 第10類 葉巻状工具による条紋が脇に施される 第11類 格子目文が施される			
第5群 後期中葉							
第6群 把手部							
第7群 後期後半							
第8群 晩期前半							
第9群 晩期後半							
第10群 無文土器							
第11群 底部							

第1群 縄文時代中期中葉の土器（第15図1～6、図版5）

1、深鉢口縁。2、隆帶で渦巻、波状文を施す。3～5、把手部。6、沈線地に、刻みの入った隆帶が付く。本群は、勝坂・井戸尻式に比定される。

第2群 中期後葉の土器（第15図7～12、図版5）

条線地に、渦巻・弧状・縦位の隆帶が付く。曾利式に比定される。



第15図 土器

第3群 中期末葉の土器 (第16図、第17図33・34、第20図98・99、図版5・7)

第1類 沈線が主体の文様構成である (13~14)。13、平行沈線が垂下し、押引き状の短沈線がまばらに施される。14、沈線と隆帯が曲線的に配され、刺突文が加えられる。

第2類 微隆起線や縄文が施される (15~34・98・99)

15は微隆起線下に弧状沈線。16~22、24は微隆起線区画内に縄文が施される。23は無文地。25~28は微隆起線に沿って円形刺突文が並ぶ。27、胴部に沈線区画の縄文が施される。28は無文地。29、口縁下位に円形刺突文、胴部に縄文が施される浅鉢。30~34・98、胴部に沈線区画の縄文が施される。30、鈍状の隆帯がめぐる蓋。33、内外面とも器面は荒れ、施文は浅く不明瞭である。色調はにぶい褐色で、焼成はやや悪い。34、胴部中位から下位にかけて1/4が残存する。沈線区画の磨消縄文が施される。沈線はやや粗い。胎土に白色砂粒を含む。色調は橙色で、焼成は良い。98、深鉢。口縁部から胴部中位にかけて1/4が残存する。推定口径26.0cm、残存高22.0cm。口縁下位に隆起線をめぐらし、胴部に沈線区画の磨消縄文を施す。胎土に褐色スコリア・石英を含む。色調は外面黒褐色・内面赤褐色を呈し、焼成は良い。99は接合しないが、同一個体と思われる。

第1類は曾利V式、第2類は加曾利E IV式に比定される。

第4群 後期前葉の土器 (第17図35~第29図282、図版5~11)

第1類 磨消縄文が施される (35~85)。沈線は口縁部で横にめぐり、屈折あるいは屈曲して胴部に至る。胴部の沈線は曲線的だが、55・56のように屈折部をもつものもある。48~52、口縁の一部が小波状を呈する。82、刻みの入った隆帯が垂下する。83~85は、胴部が張り、磨消縄文が横位に配される。

第2類 平行沈線間に列点文が加えられる (86~97)。95~96は円形、97は櫛齒状工具による列点である。沈線は胴部上位で屈折して斜位に垂下するもの (86~89) や、短く屈折するもの (90、91) がある。

第3類 主に沈線が施される深鉢 (105~180)。文様などで6種 (a種~f種) に分類できる。

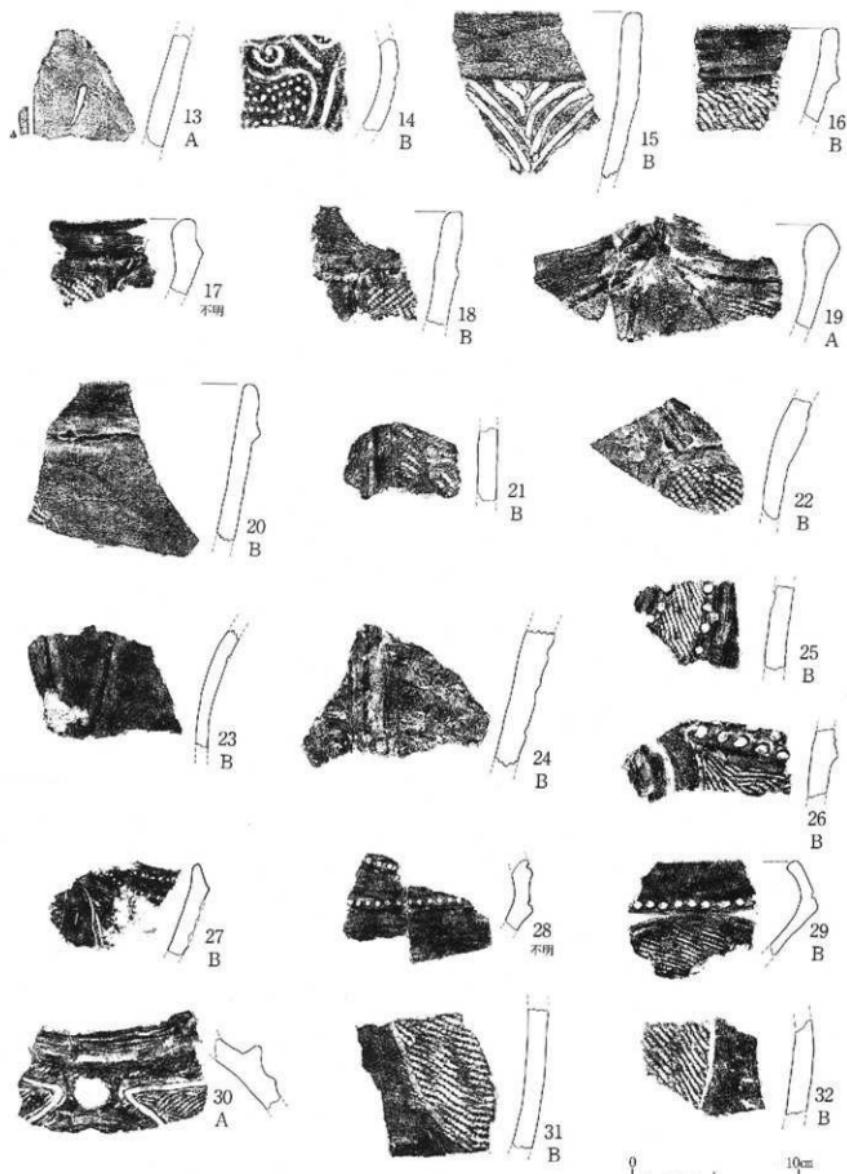
a種 口縁下位に沈線がめぐるもの (105~114、128~131)。105~108・112・128~131は沈線が屈曲・屈折して垂下する。112~114は平縁口縁の上端に沈線や刺突文が施される。110・111は3本単位の平行沈線が施される。109、推定口径30.0cm。色調は燈色で、焼成は良い。胎土に石英・赤褐色の砂粒を含む。

b種 口縁下位に斜位の沈線が施されるもの (115~119)。

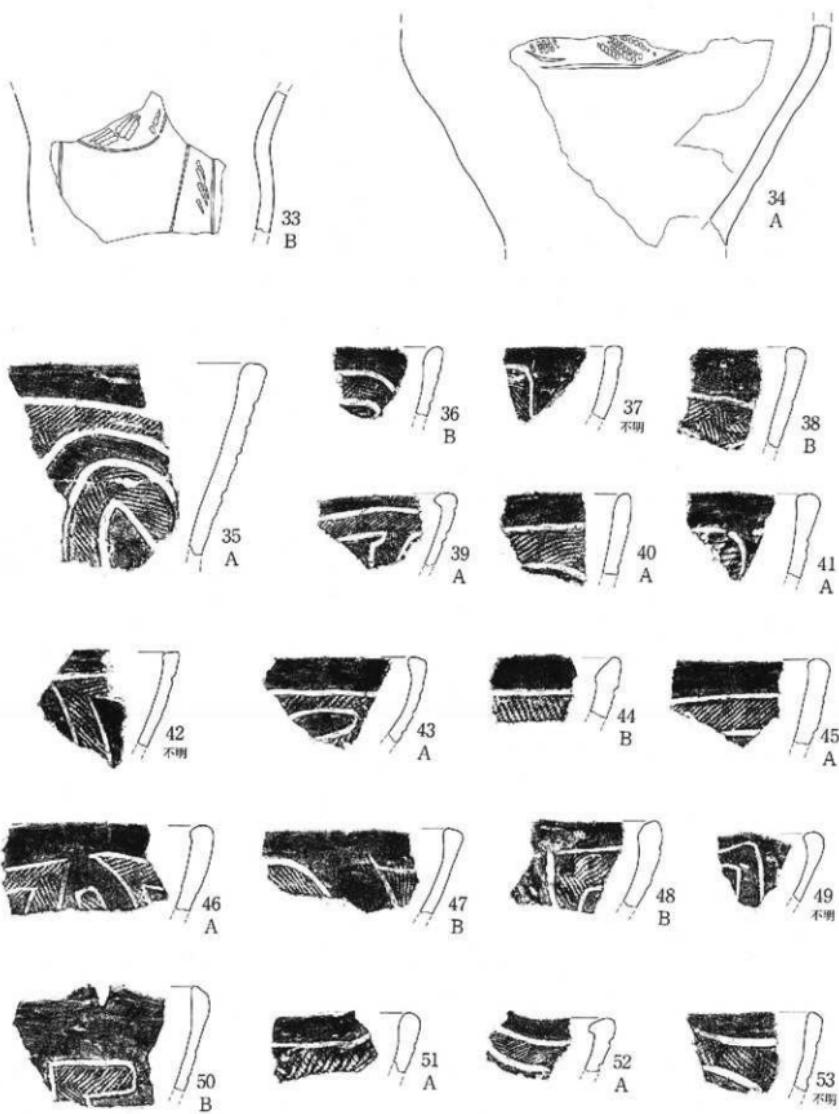
c種 縦位の平行沈線が施されるもの (100・124・174~179)。100は、頸部がゆるくくびれる深鉢。口縁部の一部、および胴部1/4が残存する。推定口径28.0cm、残存高22.5cm。口縁部に沈線と隆帯がめぐる。胴部は縦位の沈線による区画中に、3本単位の沈線が斜位に垂下して胴中位で交叉する。交叉部の両端には1対の円形刺突文が加えられる。また、この3本単位の沈線に沿って平行沈線が弧状に垂下しており、その先端は縦位区画の沈線と接している。胎土には金雲母・赤褐色砂粒を含む。色調は黄橙色・褐灰色を呈し、焼成は良い。174~179、斜位・縱位の沈線が施される。

d種 胴部に曲線的な平行沈線が施されるもの (132~139)。沈線は135・136を除き、浅い施文である。139、器面は平滑に仕上げられるが、文様は不鮮明で途切れがちである。胎土に5mmの大や大粒の砂粒を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。

e種 口縁から胴部にかけて、沈線によるU字状・逆U字状の文様が施されるもの (104・125・126・140~173)。104、頸部がゆるくくびれる深鉢。口縁部から胴部下位にかけて1/3が残存する。推定口径46.0cm、残存高32.0cm。U字状・逆U字状の沈線が縦位に対向する。U字状沈線の端は口縁部までせり上がった後、直線的に垂下する。沈線は太く浅い。胎土に白色砂粒を多く含む。色調は橙色・赤褐色で、焼成は良い。口縁上端は、104のように無文となるものと、沈線がめぐるもの (140) がある。沈線は全般に浅く施されている。

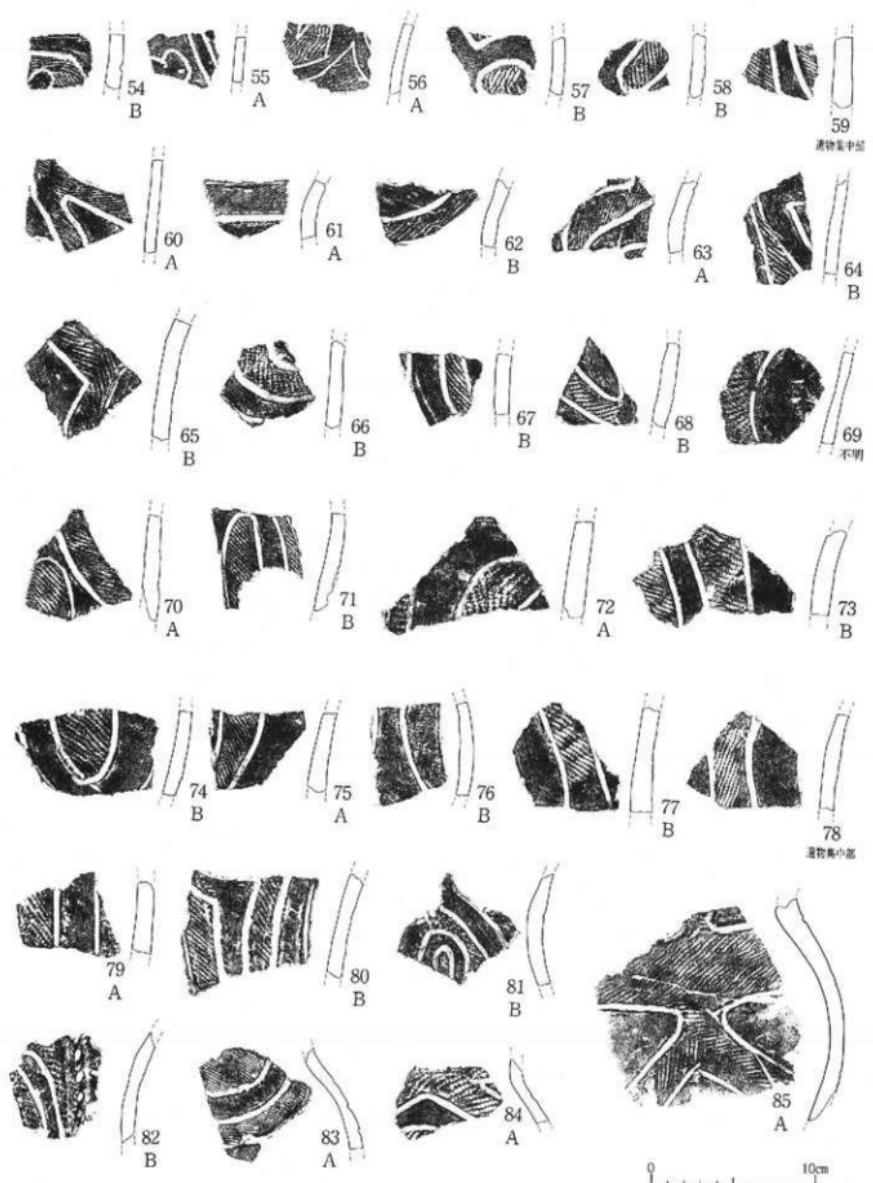


第16図 土器

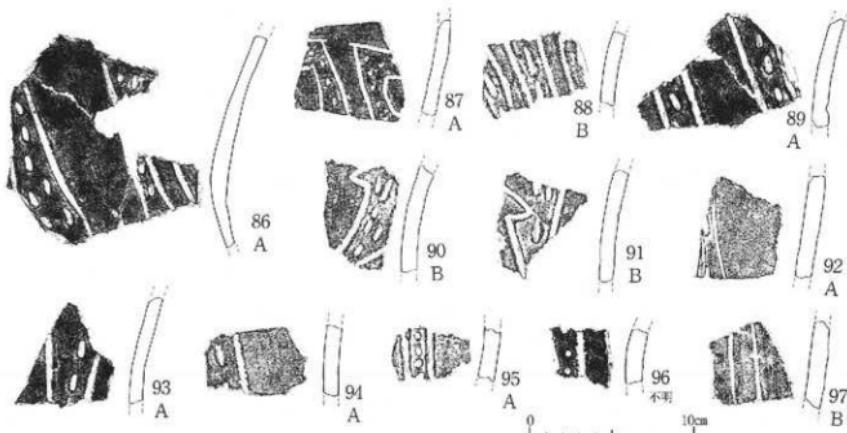


0 1 10cm

第17図 土器



第18図 土器



第19図 土器

f種 沈線が蛇行するもの (180)

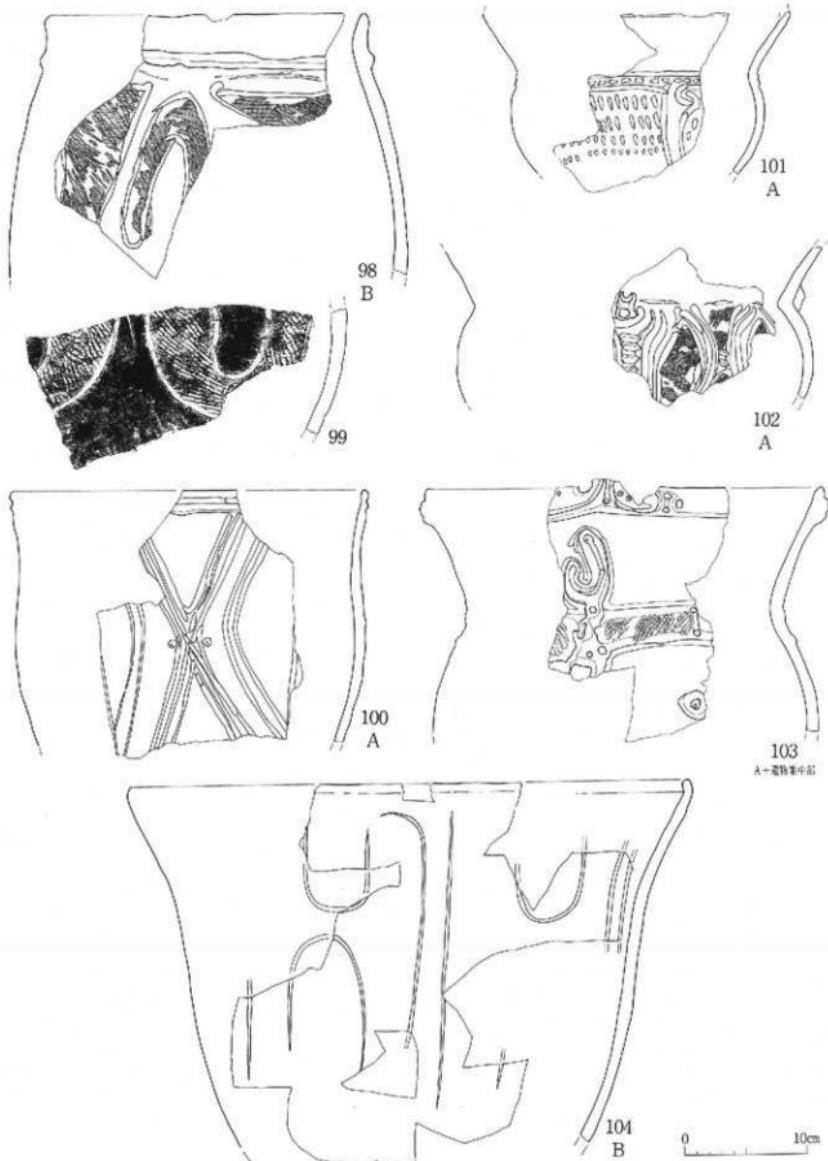
第4類 繩文地で、沈線が施される深鉢 (181~185)。185は刺突が加えられた隆帯が垂下する。

第5類 口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部が球状に張る深鉢 (186~230) で、胴部に主文様が配される。文様から3種 (a種~c種) に分類した。

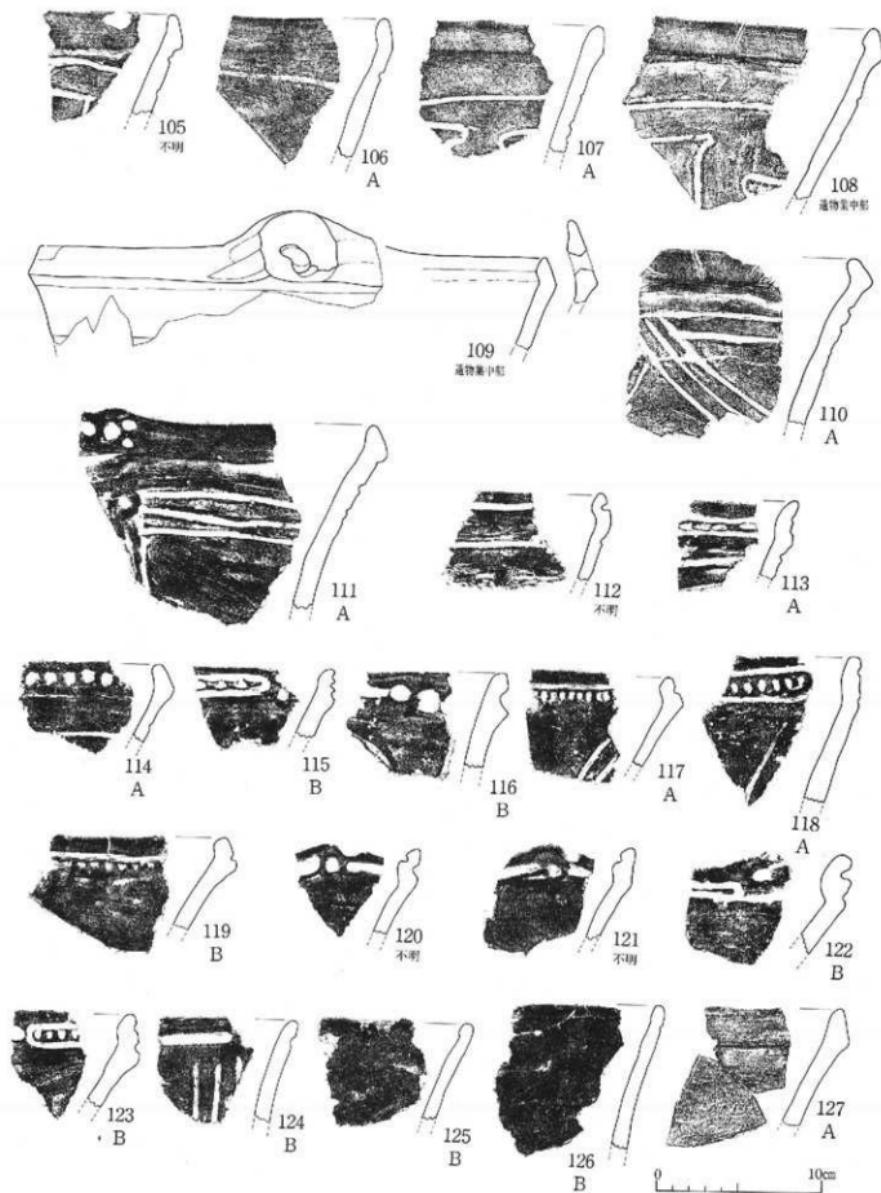
a種 繩文地に沈線が施される (102・186~213)。大半の沈線は曲線的に施される。頸部には橋状把手 (186) や、貼付文が付けられる (187・188・194)。102、頸部から胴部中位にかけての1/4が残存する。頸部に8字状貼付文が付く。胴部は縦文を地文とする。3本単位の沈線が曲線的に垂下し、短沈線が付随する。胎土に白色砂粒、石英を含む。色調はにぶい橙色、灰褐色を呈し、焼成は良い。213は頸部に4~5本単位の沈線が縱に配され、つぎのb種に似た文様構成である。

b種 頸部に磨消縄文が施される (103)。口縁部から胴部上位にかけての1/4が残存する。推定口径32.0cm、残存高22.0cm。口縁部は一部波状を呈し、波頂部には貫通孔、沈線、円形刺突文、および両端に円形刺突文を伴う短沈線が施される。波頂部直下に隆帯によるJ字文と、さらに下端に接して縦長の8字状貼付文が付く。頸部には隆帯区画の縄文帯がめぐり、区画内には、両端に円形刺突文を伴う縦位の短沈線が配される。下位の隆帯には沈線が付隨しており、ともに8字状貼付文の直下から垂下する。胴部には円形刺突文が加えられた貼付文が認められる。胎土には白色砂粒を含む。色調はにぶい橙色、黒褐色で、焼成は良い。

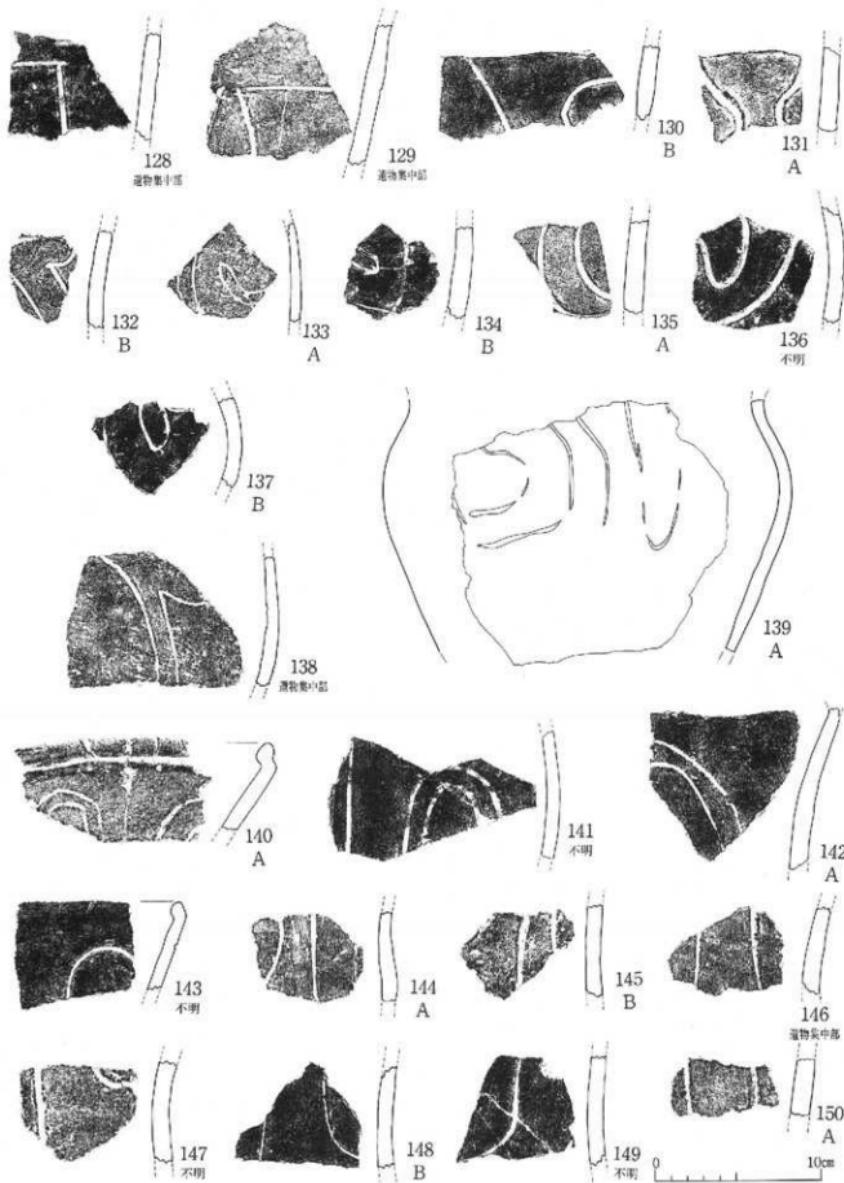
c種(101・214~230) 縦文は施されず、沈線で文様が構成される。101、口縁部から胴部下位にかけての1/4が残存する。頸部に刺突文を伴う2本の沈線がめぐり、下位沈線の一端は屈曲して垂下する。地文として縦長の短沈線が施される。胎土には石英、白色砂粒を含む。色調は赤褐色、灰褐色を呈し、焼成は良い。214~221は多条の平行沈線文が施される。215、頸部に断面三角形の貼付文が付き、これを中心に同心円状の沈線が配される。さらにその外側に沈線が付隨する。216・217も同一の文様構成と思われる。218~221、頸部をめぐる横位、弧状の沈線文で区画された中に、縦位の短沈線が施される。222~225、渦巻状あるいは弧状の沈線と、斜位の沈線が施される。222の沈線交差部には円形貼付文が付く。226、頸部に3本単位の沈線がめぐり、胴部に縦位の沈線が施される。227~228は、斜位・弧状の沈線が沈線。229~230、斜・縦位の沈線が施される。



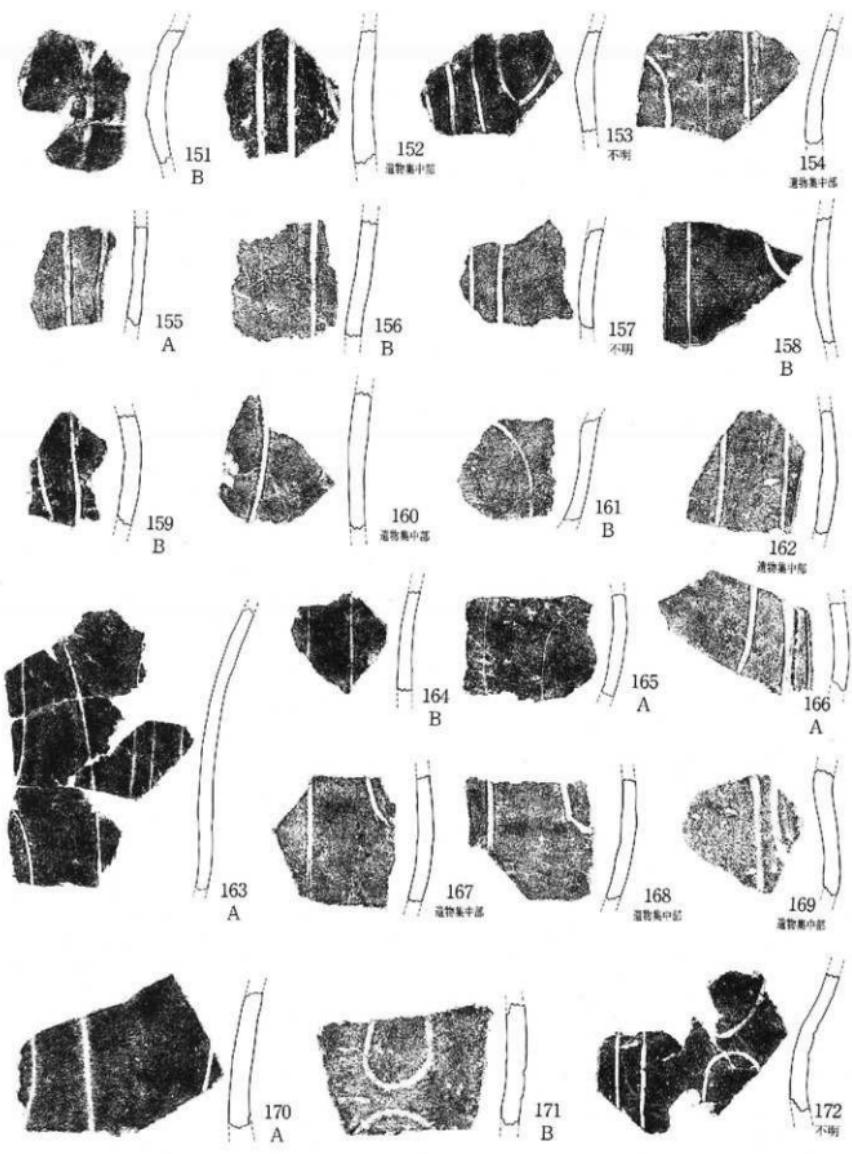
第20図 土器



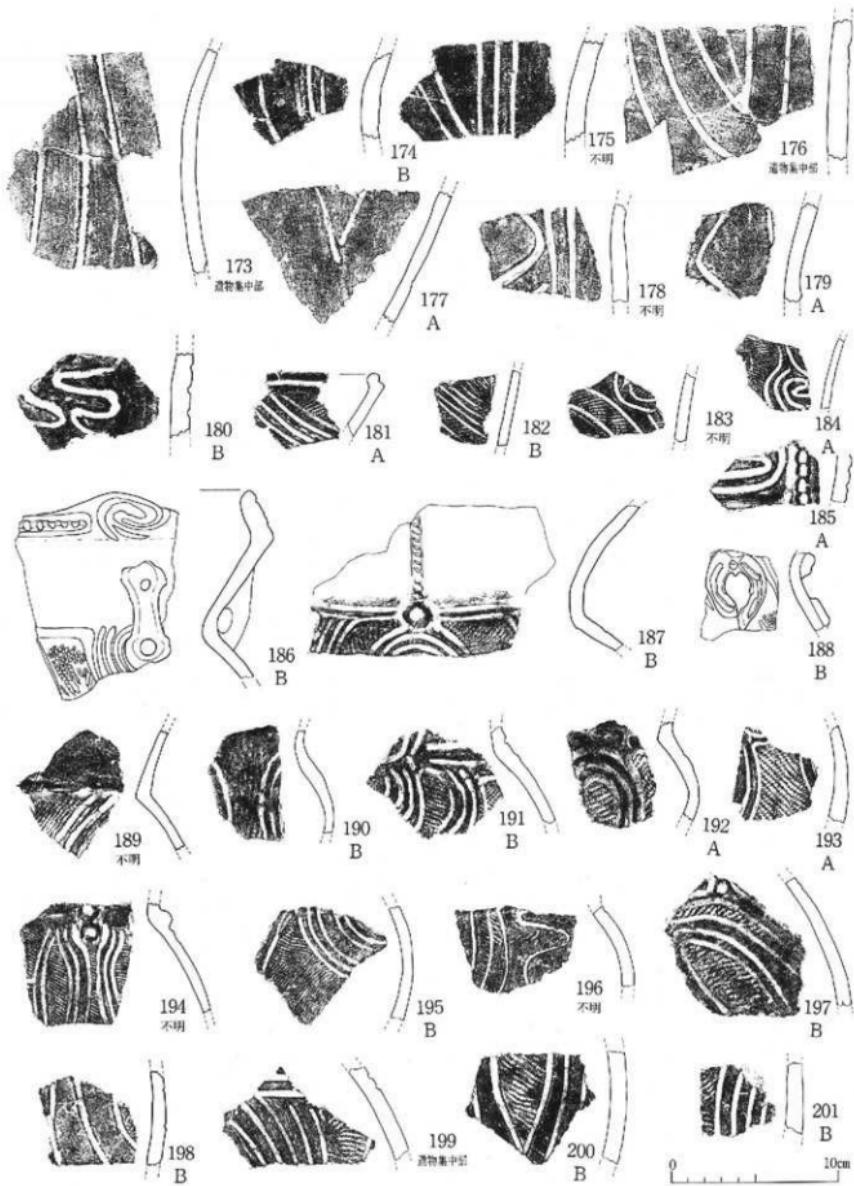
第21図 土器



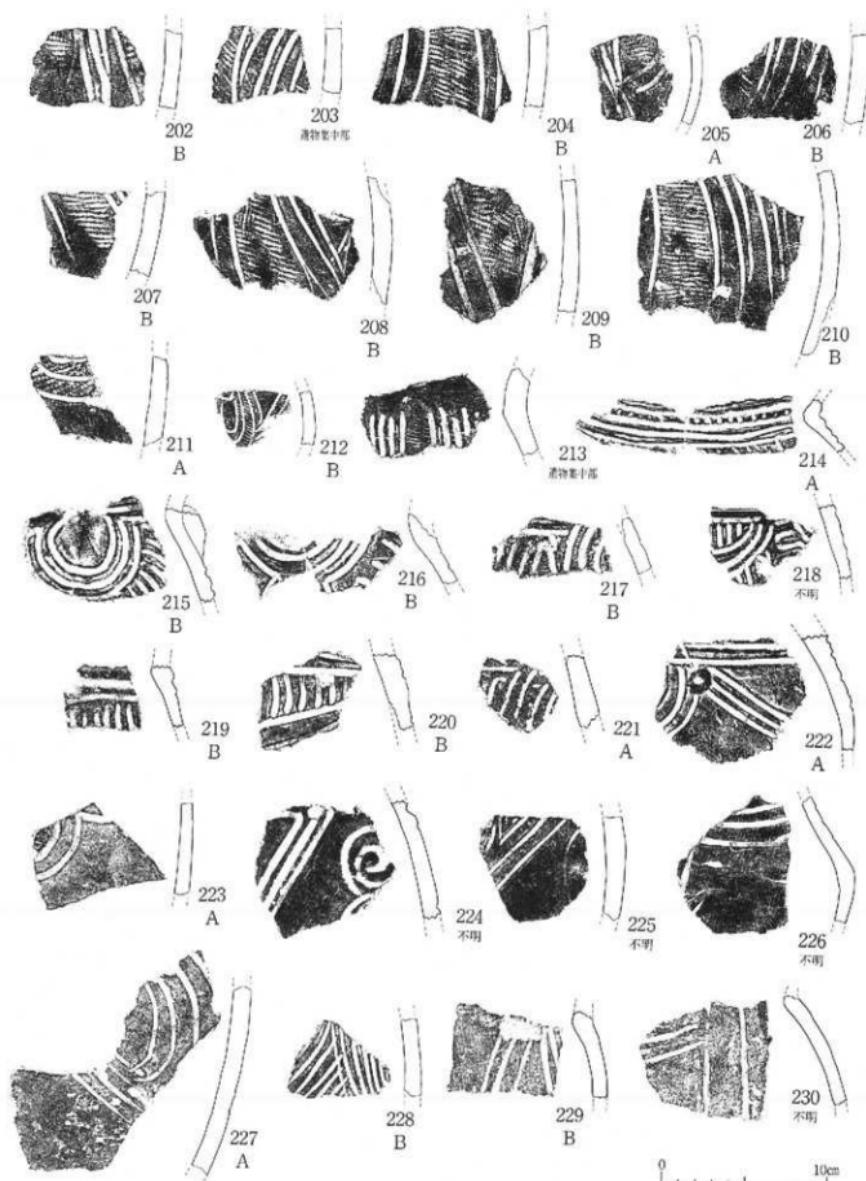
第22図 土器



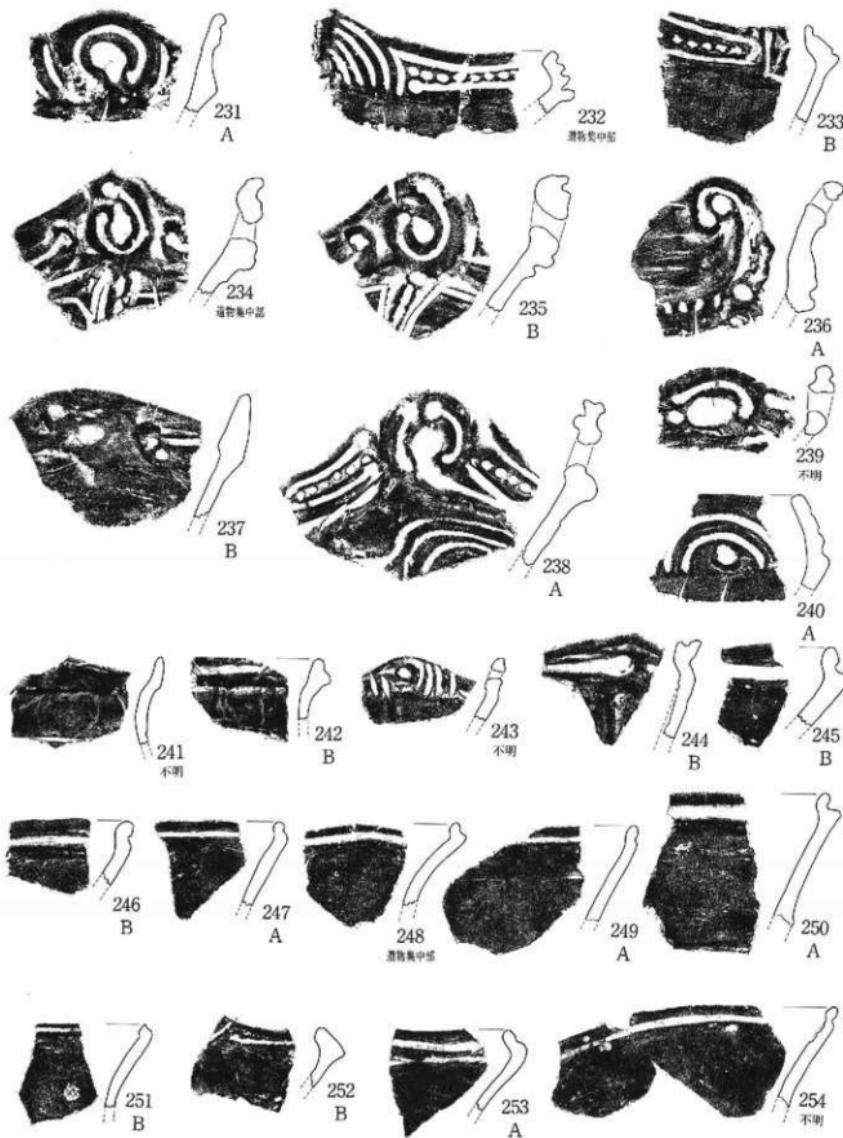
第23図 土器



第24図 土器



第25図 土器



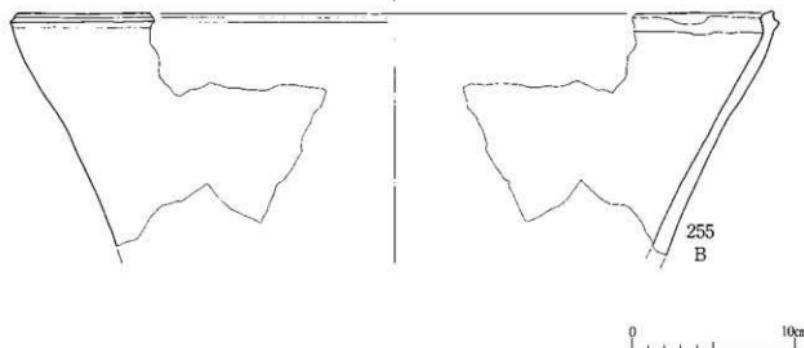
第26図 土器

第6類 第3類から第5類の口縁部である(231~239・241~254)。3種に分類できる。

a種 口縁部の一部が波状を呈するもので、波頂部の貫通孔を中心に沈線、刺突文などが施される(231~238)。237、波頂部で粘土帯の接合部がわずかに開き、貫通孔としての効果が見られる。234~236は、波頂部直下から刺突が加えられた隆帶が垂下し、隆帶両脇に沈線が施される。238、3本単位の平行沈線が横S字状に施される。

b種 脊部から直立気味に立ち上がり、口縁上位が外反する(241~242)。口縁下位は沈線がめぐる。241、口縁の一部が波状を呈し、小さな貫通孔が認められる。242、口縁上端に太い沈線がめぐり、沈線直下が隆帶状になる。いずれも焼成は良く、比較的硬質である。

c種 第5類の口縁部と思われ、口縁上端に沈線がめぐる(243~255)。255、口縁部の1/2が残存する。推定口径45.0cm。残存高14.0cm。口縁上端に沈線がめぐる。内面下半部の器面は荒れており、器面の剥落が所々に認められる。胎土には白色砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良い。



第27図 土器

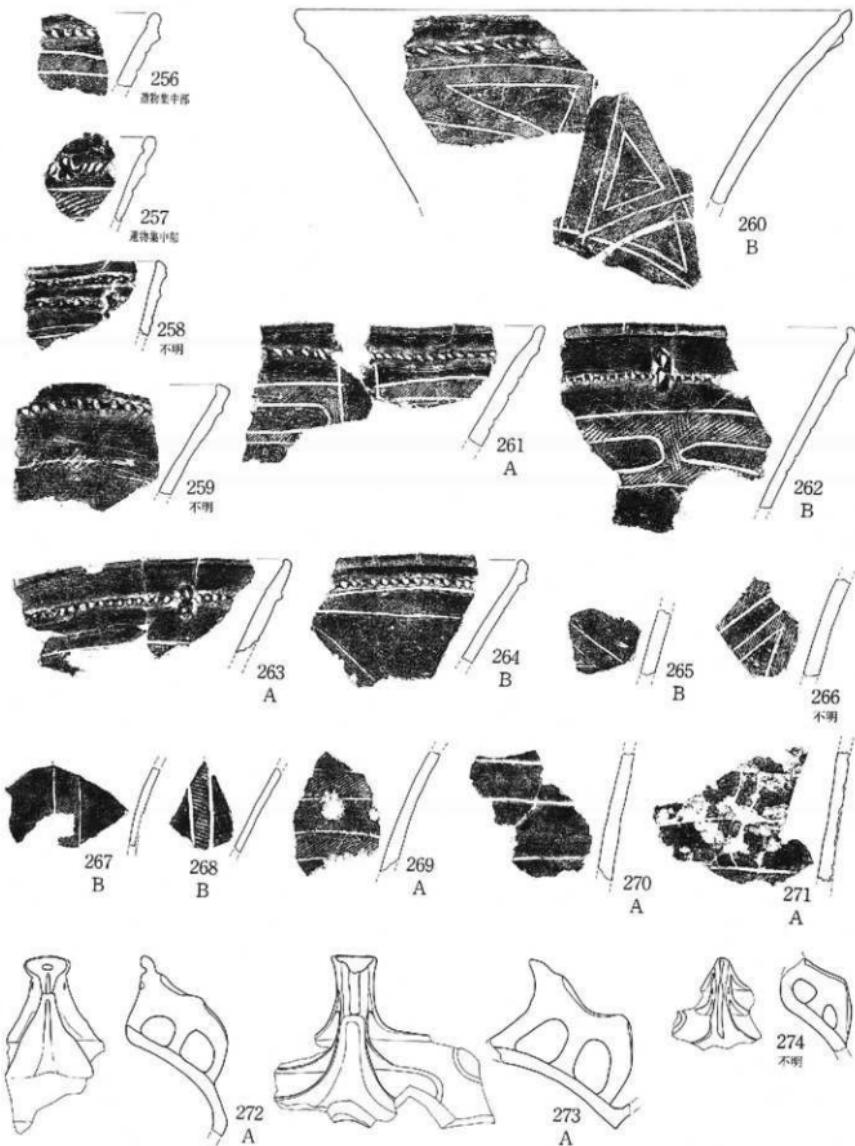
第7類 直線的な磨消繩文が施される深鉢(256~269)。胴部から口縁部にかけて直線的に開く器形である。口縁部には刻みの入った隆帶がめぐり、8字状貼付文が付けられる。258・260・264~266は、三角形状の文様構成である。260、口縁は一部波状を呈し、刺突文が加えられる。胎土には黒灰色の砂粒が含まれる。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良い。261・262は、2条の磨消繩文が、それぞれ縦に接続する。261は継位の沈線で区画される。259、擦痕状の不鮮明な沈線がめぐり、沈線に沿って繩文が粗く施される。堀之内2式。

第8類 沈線が横位に施される(270・271)。270、沈線は浅く不鮮明である。271、横位沈線に、流水状に重下する沈線が重なる。沈線は明瞭である。胎土は脆く、器面の剥落が目立つ。堀之内式に比定される。

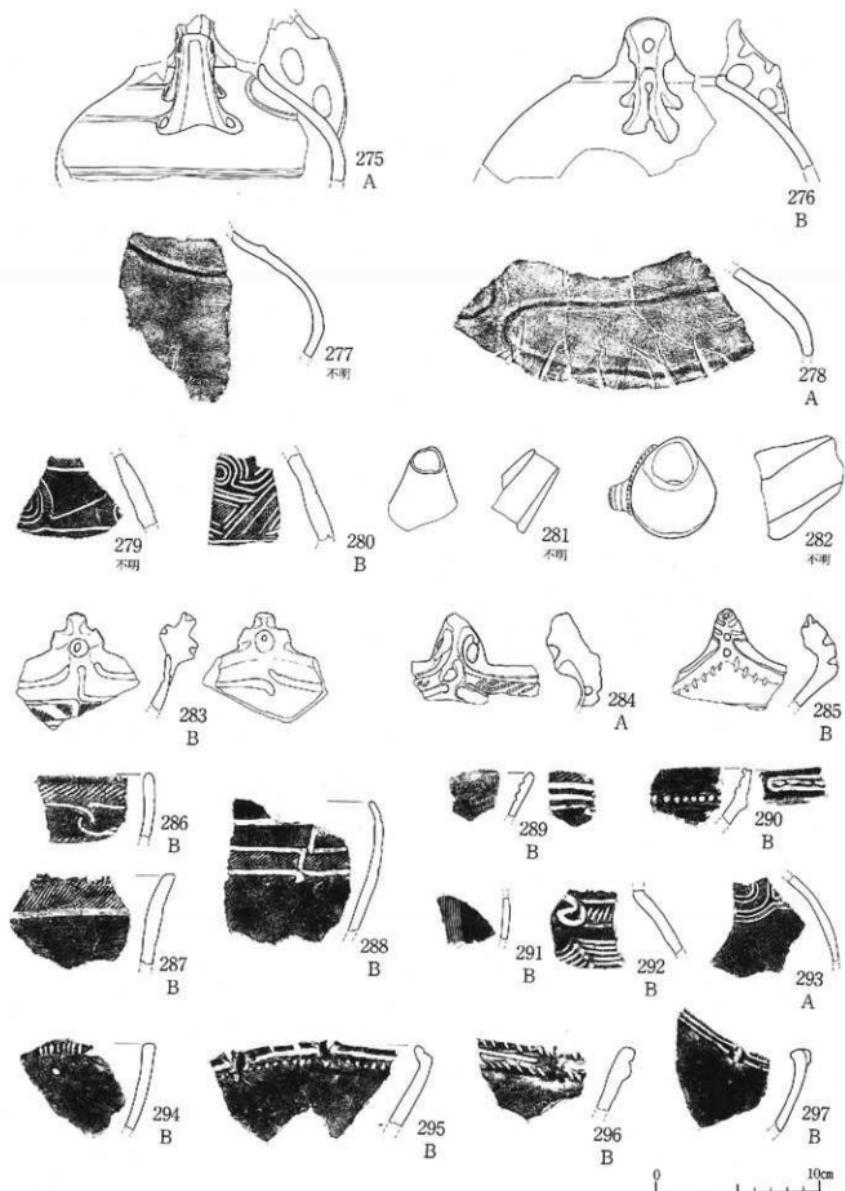
第9類 注口土器(272~282)。273~275・277・278は、胴上半部に曲線的な細隆起線が付く。279~280、磨消繩文が施される。282、注口基部に沈線、細かな刺突文が配される。堀之内2式に比定される。

第10類 横南状工具による条線が縦に施される(305~308)。305は、横位の沈線で区画される。堀之内式。

第11類 格子目文が施される(309~312)。口縁部は沈線で区画される。堀之内式に比定される。



第28圖 土器



第29図 土器

第5群 後期中葉の土器（第29図283～293、図版11）

283・284・286～288は、横位の磨消縄文が施される。283、波状口縁で、波頂部に円形刺突が加えられた小突起が付く。磨消縄文は綫の短沈線で区切られる。内面は横位の沈線がめぐる。284・285は焼成が悪い。286、縄文帯を区画する沈線の一端が曲線的に交差する。287、口縁部に小突起が付く。288、横位の沈線間を綫の短沈線で区切る。

291～293は、沈線の施された注口土器。291、櫛歯状工具による沈線が施される。292、頸部直下に渦巻状の沈線で区切られた平行沈線をめぐらす。平行沈線間は短沈線で埋められる。胸部には弧状の平行沈線を波状に配し、波頂部に円形刺突文を加える。293、沈線を梢円状、直線的に施し、沈線間に短沈線や刻みを密に加えている。器面は黒褐色を呈し、光沢がある。

本群は、加曾利B式に比定される。

第6群 把手部（第30図298～304、図版11）。298・300は縄文が施され、沈線・円形刺突文が加えられる。303、微隆起線、299、円形刺突文、301、刻みの入った降線と沈線がめぐり、8字状貼付文が付く。304、断面が△等辺三角形状の大きな把手。太い刻みが斜位に入り、円形刺突文が両面に施される。第3群に含まれるものかもしれない。

第7群 後期後半の土器（第29図294～297、図版11）

294、波頂部が平坦を呈し刻みが入る。小さい穿孔が見られる。295、平縁。屈曲する口縁上端に沈線と刻みがめぐり、綫長の貼付文が付く。296、波状口縁で、口縁上端に沈線と刻みがめぐり、貼付文が付く。297、大きく波状を呈する口縁部で、口縁上端に2本の沈線がめぐり、刻みをもつ貼付文が付けられる。296、焼成は悪く、色調は橙色。他の焼成は良く、色調は黒褐色、器面は平滑である。本群は曾谷式期に比定される。

第8群 晩期前半の土器（第30図313～324、図版11）

第1類 清水大王山式（313～323）。313・317・318の口縁部には刻みの入った突帯がめぐる。

第2類 安行3b式系（324）。皿形の土器。口縁部は波状を呈するようである。口縁部に細い沈線による玉挽三叉文が施される。胎土に黒灰色の砂粒を含む。色調はにぶい黄褐色・内面は黒灰色で、焼成は良い。

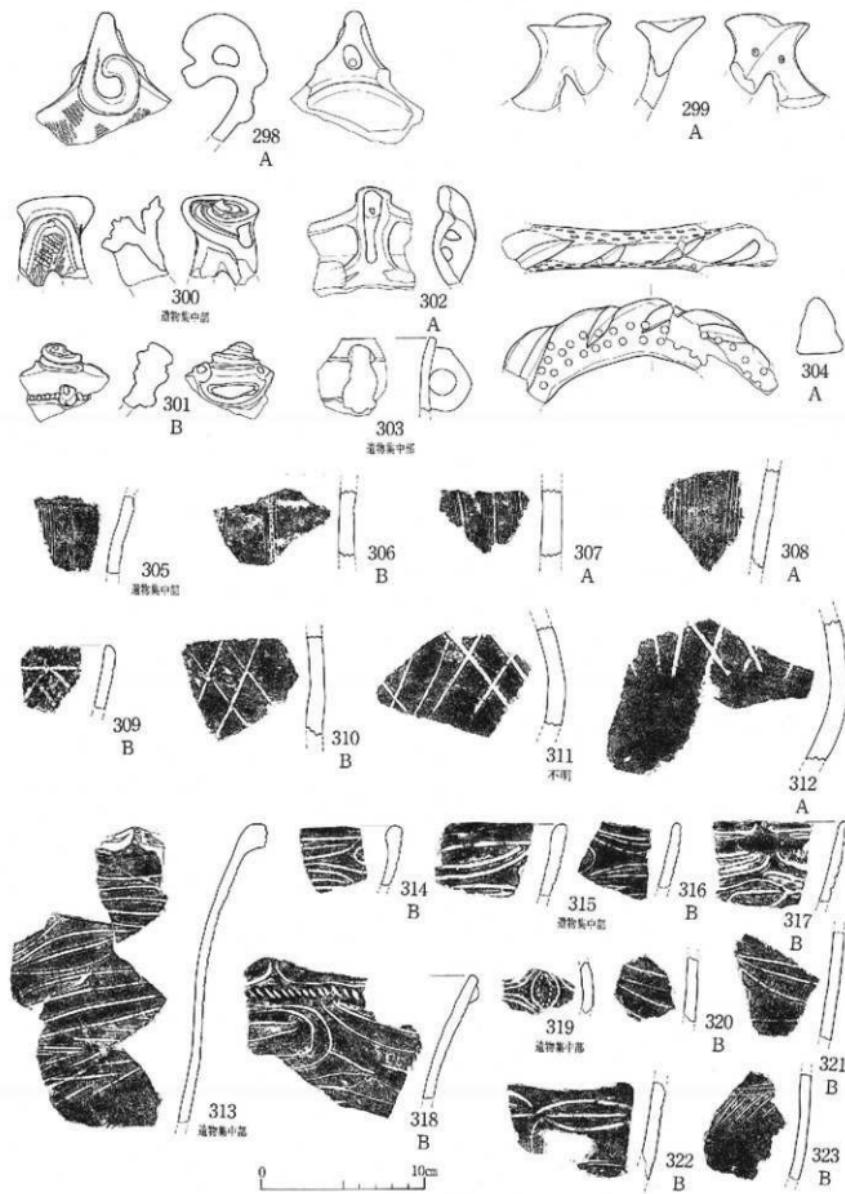
第9群 晩期後半の土器（第31図325～330、図版12）

第1類 大洞C2～A式系（325～327）。325、平行沈線間に撚糸文が施される。口縁上端は微隆起線が丁字状に施される。327、口縁部に小突起をもち、口縁上端に刻み・沈線が施される。胸部は平行沈線がめぐり、上下から刻みが入って丁字状の文様となる。

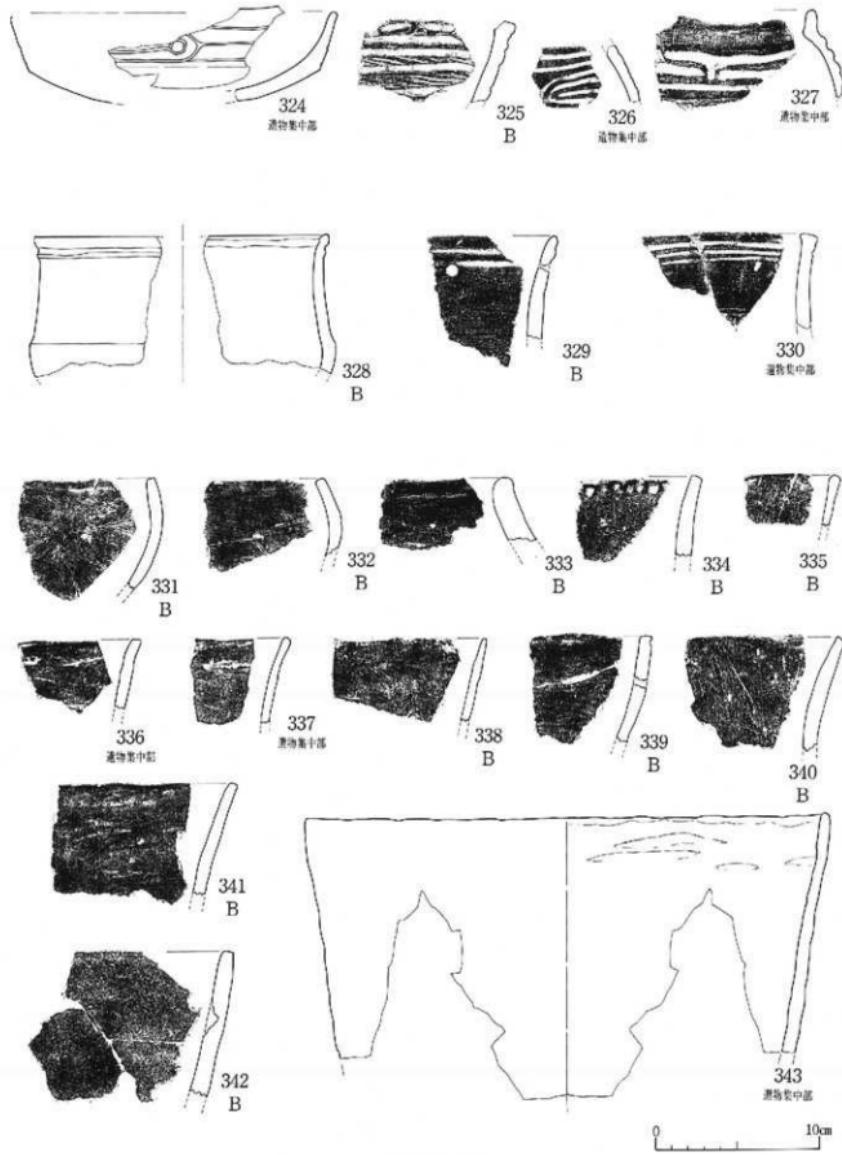
第2類 浮線文系（328～330）。328、肩部が張り、口縁部が内傾気味に立ち上がる。口縁上端の内外面に沈線がめぐり、外側の沈線直下はわずかに隆起する。胎土に金雲母、白色砂粒を含む。色調は黒褐色を呈し光沢がある。焼成は良い。329・330、色調は橙褐色を呈する。

第10群 無文土器（第31図331～343、図版12）

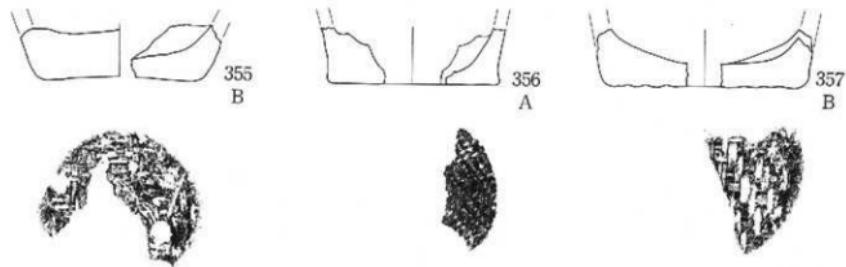
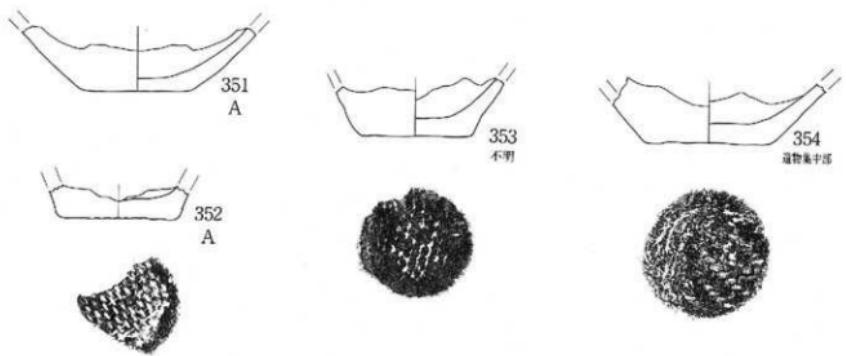
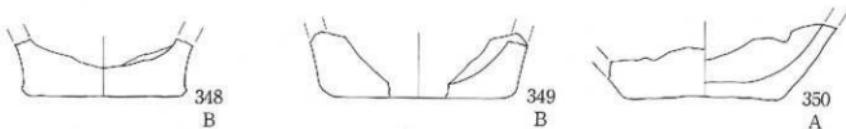
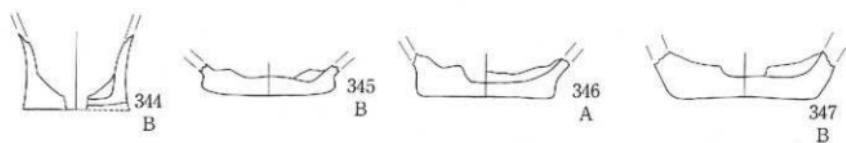
334、口縁上端に円形の刻みが入る。口唇部の形態は、平坦（336・339～342）、尖頭状（338）、丸い（335・337）がある。343、無文の深鉢。口縁部から胴部下位にかけて1/4が残存する。推定口径46.0cm。残存高32.0cm。内面に横・斜位の整形痕が見られる。胎土に5mm～8mm大の砂粒を含む。色調は橙色を呈し、焼成はやや悪い。



第30図 土器

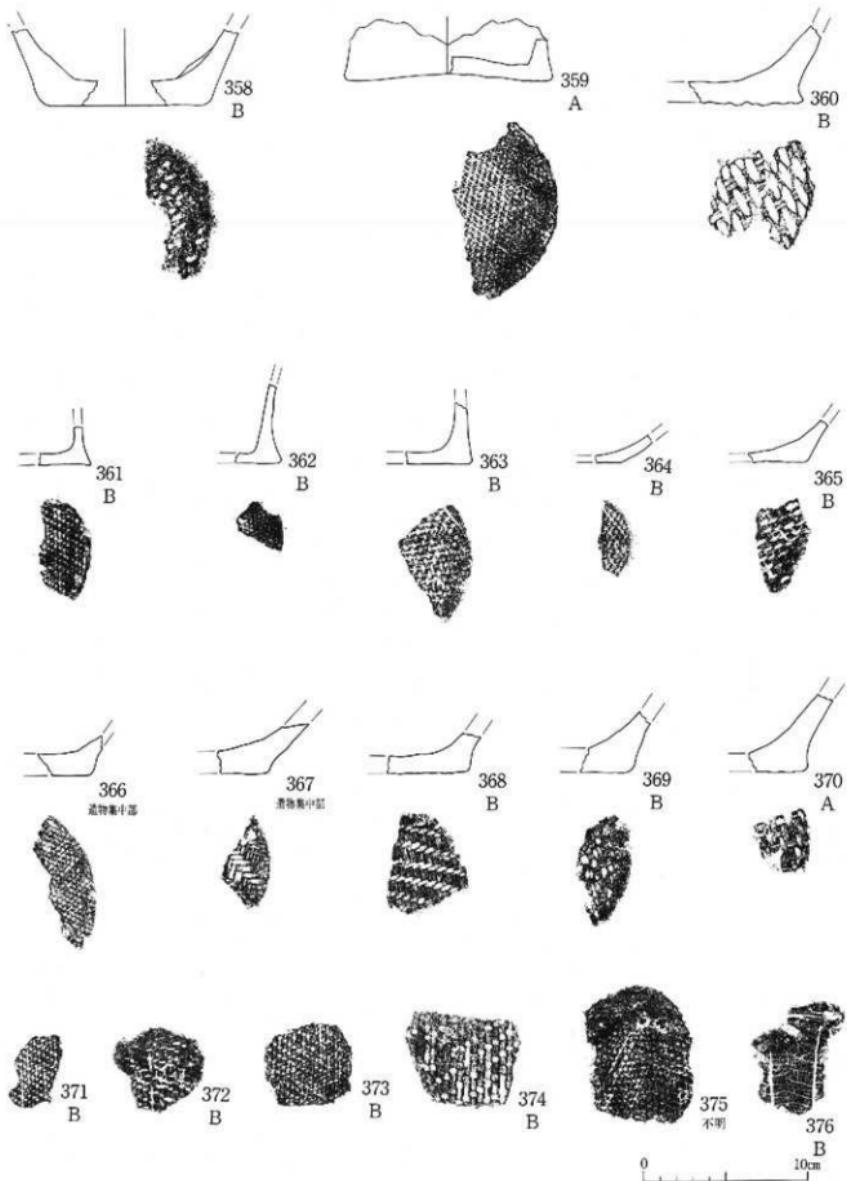


第31図 土器



第32図 土器

0 10cm



第33図 土器

第11群 底部（第32・32図、図版12）

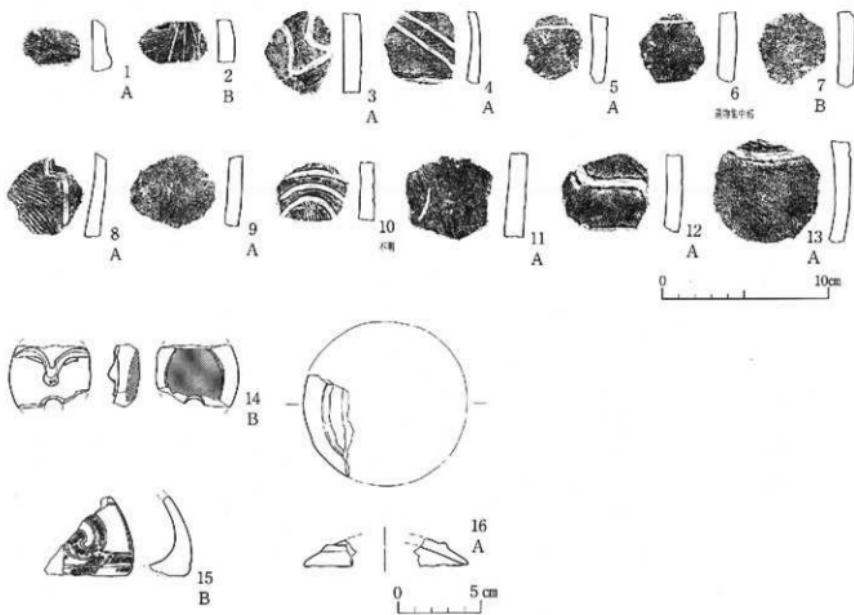
352～375は網代痕、376は木葉痕。

第3節 土製品

土製円盤（第34図1～13、図版12）いずれも胴部片を利用している。1、2の周縁は磨滅し、平面は楕円形を呈する。他の周縁は打ち欠き状で、平面は円形が基調となる。2は加曾利B式、他は堀之内式に比定される。

土偶（第34図14・15、図版12）14、顔部。眉から鼻を隆線で表現し、鼻孔が開けられる。内面に円形の剥落痕がある。15、脚部と思われる中空の土製品。底面は平坦で、丸く立ち上がる。磨消純文が施され、下端に沈線がめぐる。胎土は、14・15ともに黒灰色砂粒を含む。色調は、14、にぶい黄橙色。15、色調は褐灰色である。堀之内式に比定される。

蓋（第34図16、図版12）微隆起線が付く。堀之内式に比定される。



第34図 土製品

第4節 石器

遺物集中部を含め、遺物包含層から出土した石器87点を報告する。この他にも破片資料があるが本書では割愛した。器種には石鎌、石錐、加工痕・使用痕のある剥片、石核、石匙、打製石斧、礫器、磨石類、蔽石、凹石、石皿、磨製石斧、石錘がある。このうち加工痕のある剥片と磨石類が数多く出土している。この他に剥片が多く、確認できただけで206点にのぼる。剥片の石質はチャート1点の他はすべて黒耀石であった。石器の中には、被熱により赤化したり吸炭を受けたものが多く見受けられた。石器の大半は遺物包含層である第II層の出土である。石器の時期は、土器と同じ縄文時代中期から晩期に属するものであろうが、主体は後期に比定できよう。

石鎌（第35図1～11、図版13）

11点出土している。凹基無茎鎌が大半を占め、平基有茎鎌が1点出土している（3）。3の平面は五角形になる。8・11はやや形態が崩れており、未製品の可能性がある。破損の見られるものは5点で、片脚を欠くものの4点、先端を欠くもの1点である。石質はすべて黒耀石である。

石錐（第35図12・13、図版13）

2点出土している。石質はいずれも黒耀石である。

加工痕・使用痕のある剥片（第35図14～23・26・27）

10点を報告する。剥片の中にはこの他にも加工痕のあるものが見られることから、さらに数量が多くなる可能性がある。14～17・26・27は、剥片の縁辺部に使用痕と思われる微細な刺離痕が連続するものである。石質は14～17が黒耀石、26・27はチャートである。

石核（第35図24・25）

24は全体が自然面で覆われる。25は裏面に自然面が残る。石質はいずれも黒耀石である。

石匙（第36図28・29、図版13）

28、粗く打ちかかれ一部に自然面が残る。29、つまみが横に付く。刃部はわずかに内湾する。石質は28凝灰質砂岩、29粘板岩。

打製石斧（第36図30～34、図版13）

すべて「短冊型」と呼ばれる形態である。33・34は、基部側の両側縁がわずかにくびれる。いずれも刃部や基部を欠損しており、完全に遺存するものは無い。石質は凝灰質砂岩・粘板岩。

礫器（第36図35・36、第37図37・38、図版13）

35・36、両面から大きく打ち欠いた後、片面に細部の剥離を加えて刃部を作りだしている。37・38、素材の一部に片面から粗い剥離を加えているが、細部の剥離調整は見られない。石質は凝灰岩・粗粒砂岩・花崗岩。

磨石類（第37図39～47、第38図48～50、第39図61～67、図版13）

蔽石の機能を合わせ持つものも含んだ。39～50は磨面のみが見られる。41は球状素材の一面に平滑な磨面を

もつ。46・47は表裏・両側面に磨面を持ち、いわゆる石歯型と呼ばれる形態である。48・49は棒状素材の一端に平滑な磨面をもつ。50は外面と側面に磨面をもち砥石状の形態である。61～67は磨面の他に敲打痕が見られる。66は磨面の中央部に敲打痕をもつ。

石質は砂岩が主体で、他に凝灰岩・花崗岩・泥質片岩がある。

霞石（第38図52～60、図版13）

敲打痕のみが見られるものを含んだ。石質は砂岩・細礫岩・凝灰岩。

凹石（第39図68～74、第40図75～77、図版13）

凹みの断面はすり鉢状が大半だが、72は点状打痕が集中したものである。凹みは片面のみに見られるものが多いが、71・75は両面に見られる。凹みの数は1孔～2孔が大半である。凹みの位置は、器面のほぼ中央に見られる。68・69には敲打痕が見られる。石質は泥質片岩が主体で、他に砂岩・細礫岩がある。

石皿（第37図44・45、第38図59、第40図78～79、図版13）

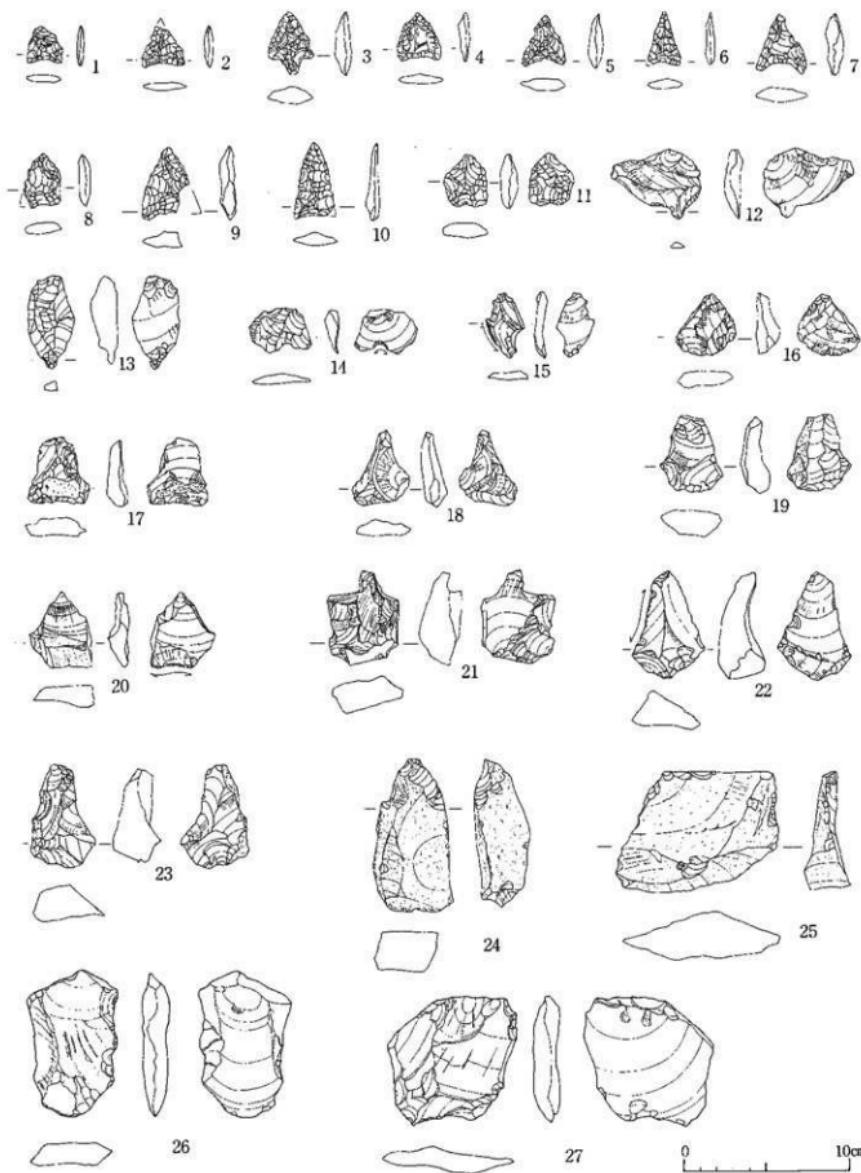
いずれも破片。44・45・59の磨面は明瞭でない。59・78の磨面は凹み、中央部に敲打痕が見られる。石質は、花崗岩（44・45・59）・玄武岩溶岩（59・78）である。

磨製石斧（第40図80～82、図版13）

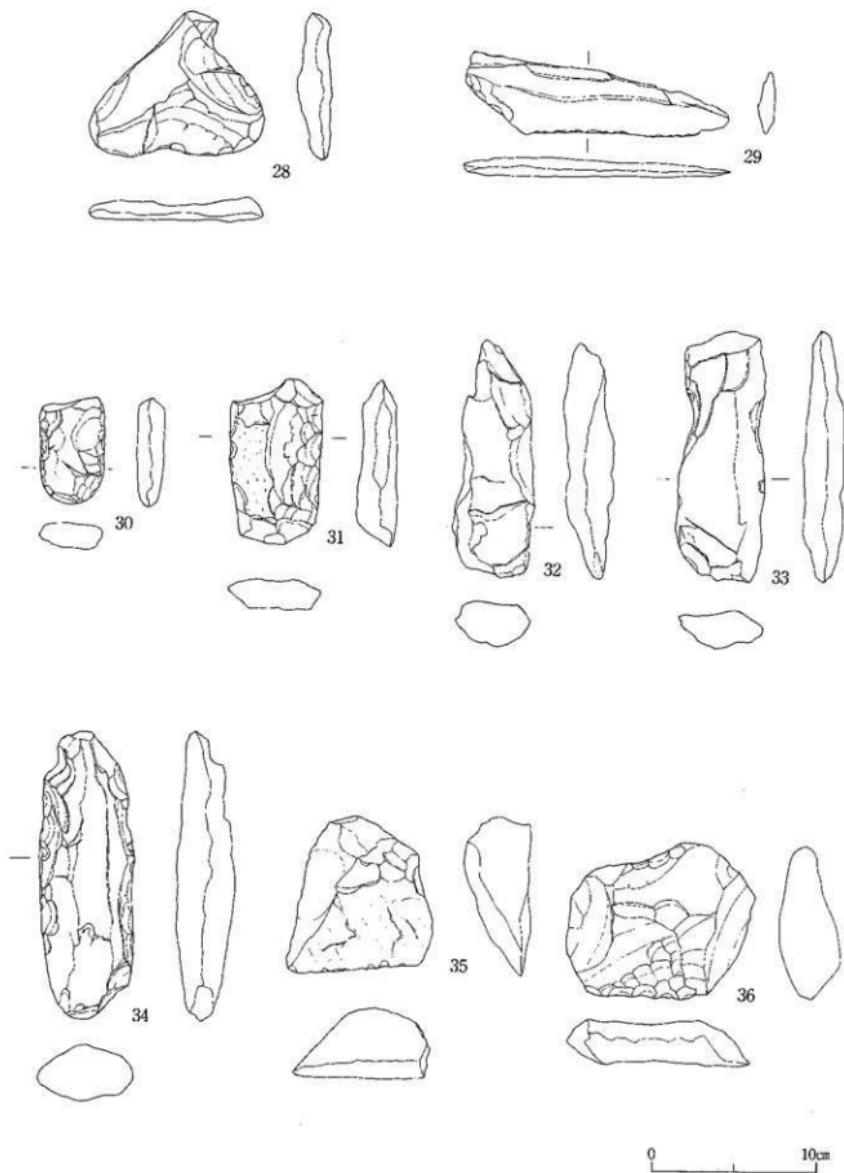
いずれも破片。82は定角式で、よく研磨されている。80・81は乳棒状で、81の刃部はよく研磨されている。80・81とも、磨面や敲打痕が見られることから、破損後に磨石や敲石として再利用されたことが推定される。

石錐（第41図83～87、図版13）

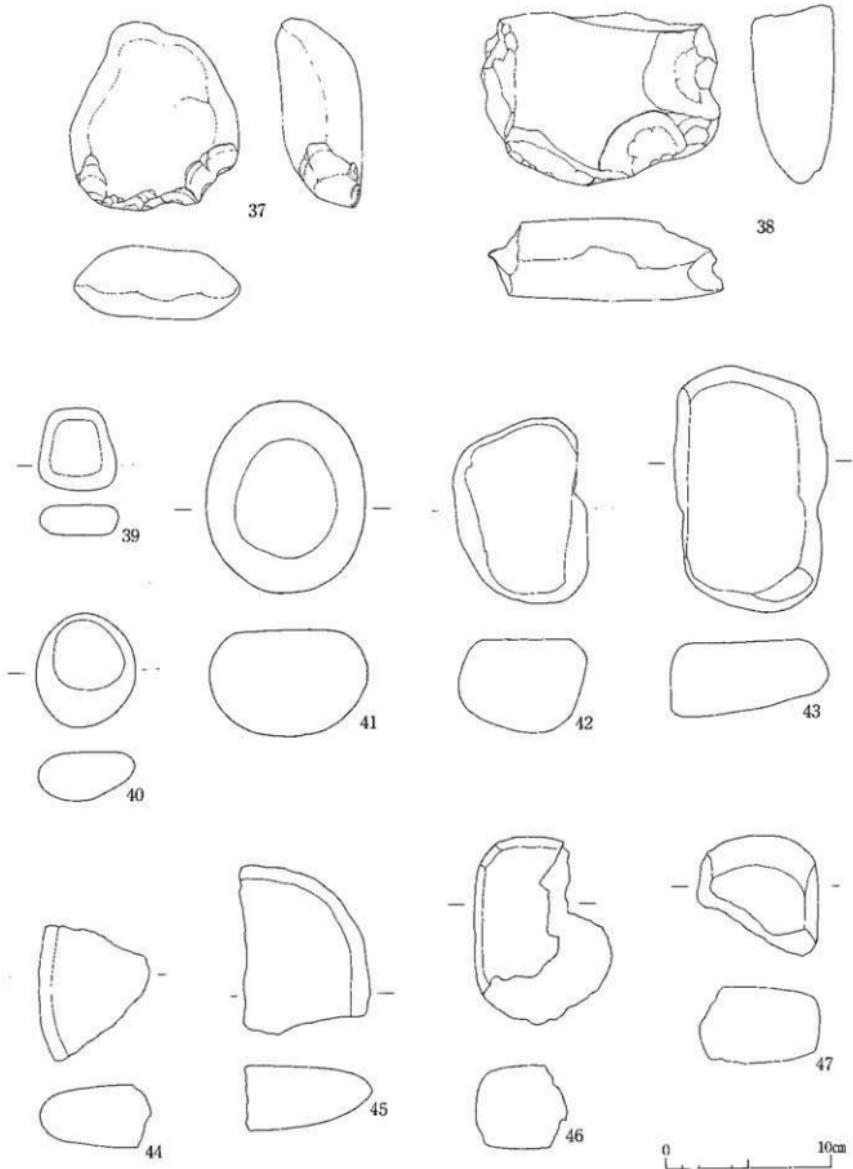
5点出土した。石質は泥質片岩・砂岩。



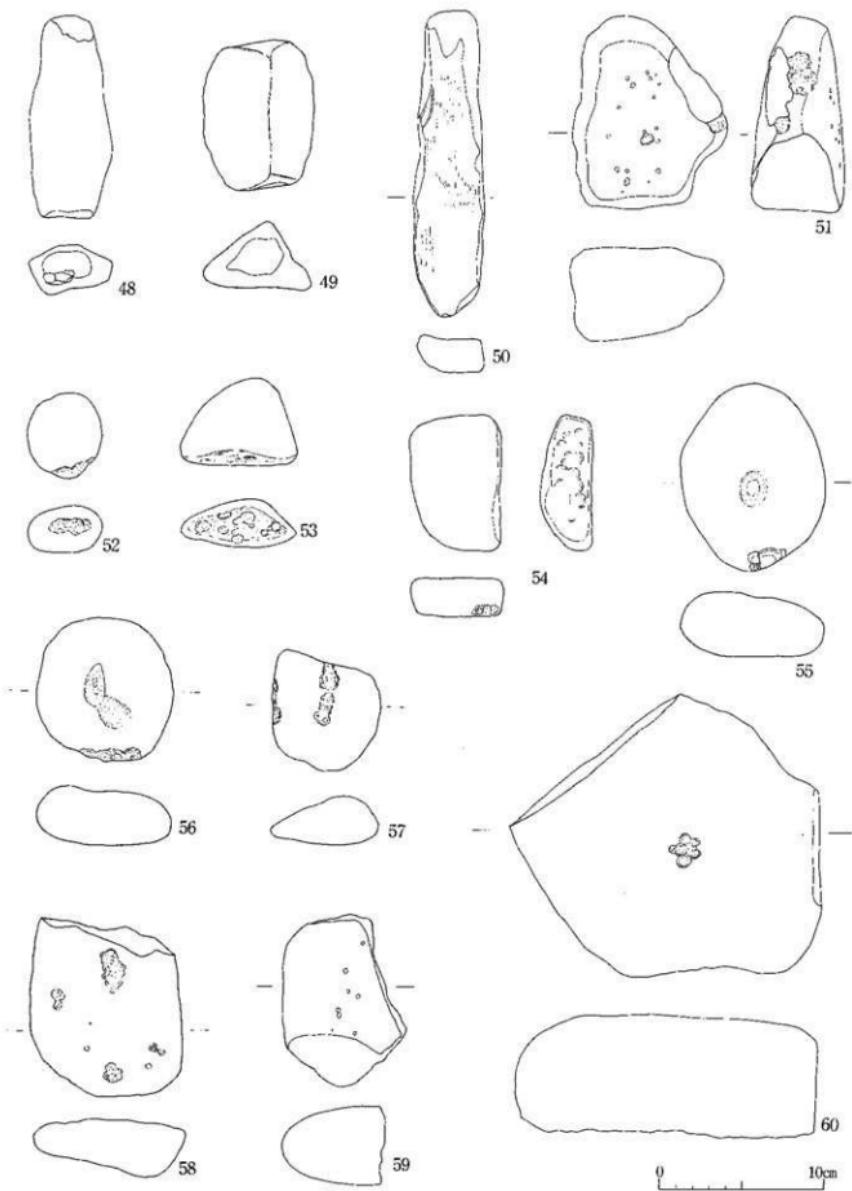
第35図 石器



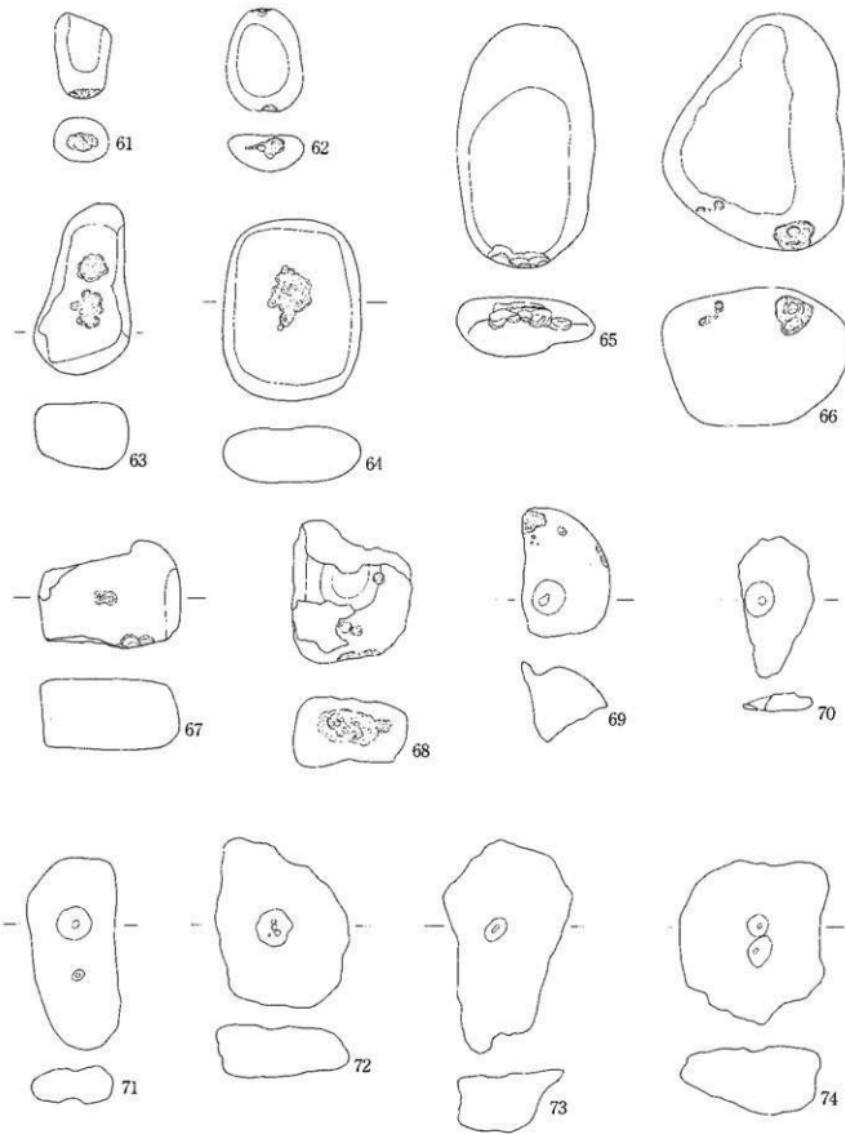
第36図 石器



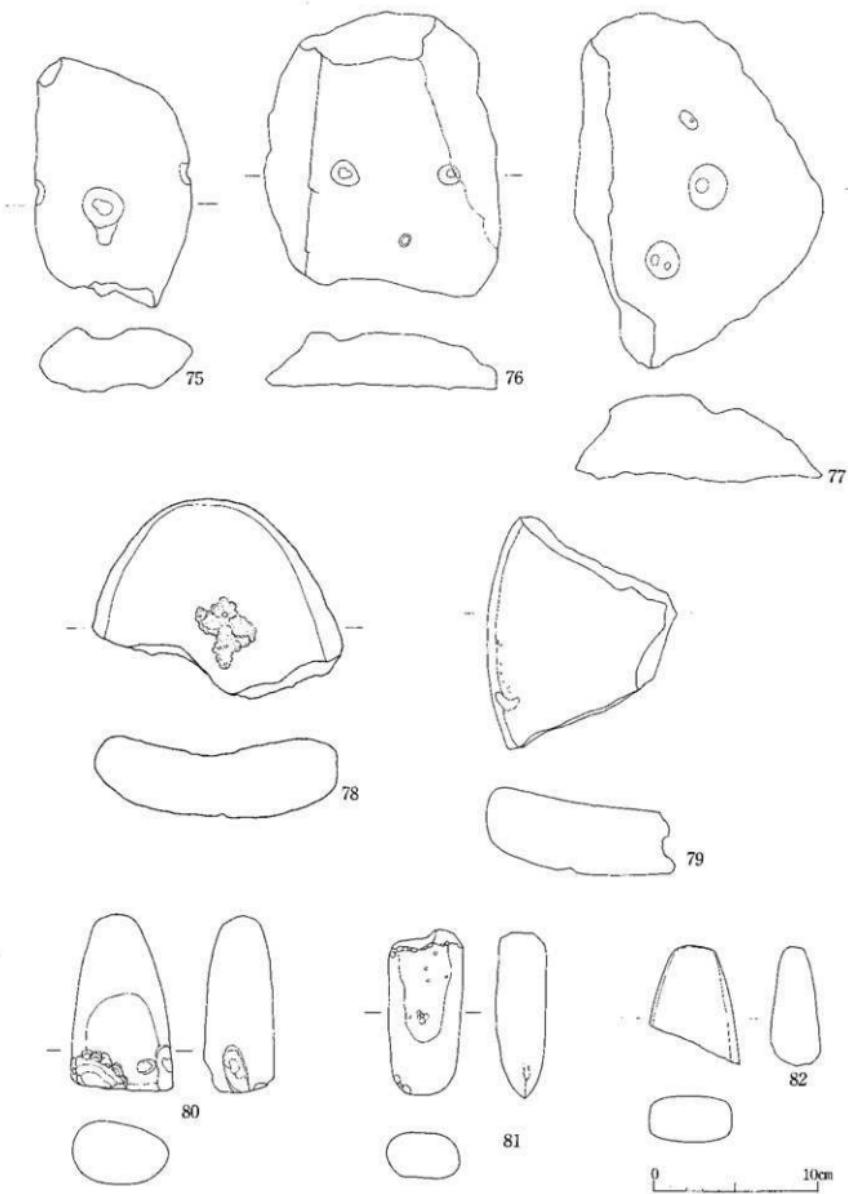
第37図 石器



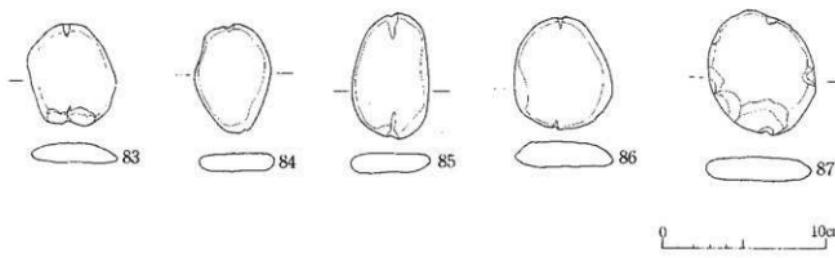
第38図 石器



第39図 石器



第40図 石器



第41図 石器

出土地	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
B	1	石鏨	1, 1	1, 1	0, 2	0, 2	黒曜石	
タ	2	タ	(1, 2)	1, 3	0, 2	0, 2	タ	
タ	3	タ	1, 9	1, 3	0, 5	0, 7	タ	
A	4	タ	1, 5	1, 3	0, 2	0, 5	タ	
B	5	タ	1, 5	1, 3	0, 4	0, 5	タ	
タ	6	タ	1, 6	0, 9	0, 3	2, 0	タ	
タ	7	タ	1, 8	1, 5	0, 4	0, 7	タ	
タ	8	タ	1, 6	1, 1	0, 4	0, 6	タ	
タ	9	タ	2, 1	(0, 5)	0, 4	1, 0	タ	
タ	10	タ	2, 2	(1, 2)	0, 3	0, 5	タ	
タ	11	タ	1, 5	1, 3	0, 5	1, 0	タ	
タ	12	石錐	2, 8	2, 0	0, 5	1, 6	タ	
A	13	タ	2, 7	1, 4	0, 8	3, 1	タ	
B	14	加工・使用痕ある断片	1, 8	1, 3	0, 2	0, 6	タ	
タ	15	タ	2, 0	1, 1	0, 2	0, 5	タ	
タ	16	タ	1, 8	1, 6	0, 6	1, 5	タ	
タ	17	タ	2, 0	2, 0	0, 6	1, 6	タ	
タ	18	タ	2, 1	1, 7	0, 5	1, 7	タ	
タ	19	タ	2, 3	2, 0	0, 7	2, 5	タ	
A	20	タ	2, 2	1, 8	0, 5	0, 9	タ	
タ	21	タ	2, 7	2, 2	0, 9	5, 6	タ	
タ	22	タ	3, 3	2, 1	1, 1	0, 5	タ	
B	23	タ	3, 0	1, 9	0, 9	0, 5	タ	
タ	24	石核	4, 5	2, 3	1, 5	21, 0	タ	
タ	25	タ	5, 0	3, 7	1, 3	20, 5	タ	
タ	26	剥片	9, 1	5, 5	1, 1	80, 0	チャート	
不明	27	タ	8, 0	8, 0	1, 1	90, 0	タ	
B	28	石匙	8, 5	10, 8	1, 3	150, 0	凝灰質砂岩	
不明	29	タ	15, 8	4, 0	1, 1	70, 0	粘板岩	被熱・吸炭
タ	30	打製石斧	(6, 5)	3, 8	1, 5	60, 0	凝灰質砂岩	
A	31	タ	(10, 0)	5, 5	1, 5	160, 0	凝灰質砂岩	
遺物集中部	32	タ	(14, 5)	4, 5	2, 6	200, 0	粘板岩	
A	33	タ	(15, 5)	5, 5	2, 2	220, 0	粘板岩	

出土地	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
不 明	34	打製石斧	(18, 0)	5, 6	3, 5	420, 0	粘板岩	
B	35	礫器	9, 2	8, 5	4, 2	320, 0	凝灰岩	
タ	36	タ	11, 2	9, 5	2, 6	330, 0	タ	
タ	37	タ	11, 5	10, 3	4, 5	710, 0	粗粒砂岩	
タ	38	タ	(10, 0)	14, 5	5, 0	1110, 0	花崗岩	
タ	39	磨石類	5, 0	4, 6	1, 9	80, 0	凝灰質砂岩	
タ	40	タ	7, 0	6, 0	3, 0	160, 0	砂岩	
タ	41	タ	11, 9	9, 9	6, 5	1120, 0	タ	
タ	42	タ	11, 4	8, 0	5, 7	650, 0	被熱・吸炭	
タ	43	タ	15, 0	9, 5	4, 4	940, 0	凝灰岩	
不 明	44	石皿	(8, 2)	(7, 0)	3, 6	260, 0	花崗岩	被熱
B	45	タ	(10, 5)	(7, 6)	4, 0	450, 0	タ	
遺物集中部	46	磨石類	(11, 5)	(8, 0)	5, 0	580, 0	細粒岩	被熱
B	47	タ	(7, 5)	7, 2	4, 5	340, 0	花崗岩	吸炭
タ	48	タ	12, 5	4, 9	3, 5	260, 0	泥質片岩	
A	49	タ	9, 0	6, 8	4, 0	300, 0	凝灰岩	
タ	50	タ	19, 0	4, 5	2, 1	330, 0	泥質片岩	
B	51	タ	12, 0	9, 5	5, 5	770, 0	花崗岩	被熱
タ	52	敲石	5, 1	4, 6	2, 9	90, 0	粗粒砂岩	
A	53	タ	5, 3	7, 0	3, 0	140, 0	花崗岩	被熱
B	54	敲石	8, 5	6, 0	2, 5	220, 0	凝灰岩	
タ	55	タ	8, 8	11, 9	4, 0	590, 0	粗粒砂岩	
タ	56	タ	9, 0	8, 4	3, 5	390, 0	細粒岩	
タ	57	タ	(7, 5)	6, 5	3, 0	130, 0	細粒～粗粒砂岩	
不 明	58	タ	(11, 0)	9, 5	3, 5	510, 0	タ	
B	59	石皿	(10, 5)	(7, 5)	4, 9	490, 0	花崗岩	被熱
タ	60	敲石	(17, 0)	19, 0	(7, 2)	3600, 0	粗粒砂岩	
タ	61	タ	(5, 2)	3, 5	2, 6	60, 0	砂岩	
タ	62	タ	6, 1	4, 5	2, 6	10, 0	凝灰質砂岩	
タ	63	タ	15, 0	8, 4	3, 6	550, 0	粗粒砂岩	
遺物集中部	64	タ	14, 5	11, 0	8, 0	1410, 0	砂岩	被熱・吸炭
B	65	磨石類	10, 5	6, 0	3, 9	350, 0	タ	
遺物集中部	66	タ	11, 0	8, 2	3, 2	480, 0	玄武岩質溶岩	
B	67	凹石	(7, 0)	8, 5	4, 4	390, 0	粗粒砂岩	被熱
A	68	タ	(8, 5)	(7, 0)	4, 2	310, 0	細粒岩	
遺物集中部	69	タ	(8, 0)	(5, 3)	(5, 0)	260, 0	砂岩	吸炭
A	70	タ	8, 5	4, 5	1, 0	40, 0	泥質片岩	
B	71	タ	11, 8	5, 5	2, 0	200, 0	タ	
タ	72	タ	10, 2	7, 9	3, 1	310, 0	タ	
タ	73	タ	13, 0	7, 6	3, 6	390, 0	被熱	
タ	74	タ	10, 0	8, 5	4, 0	440, 0	粗粒砂岩	
タ	75	タ	15, 4	9, 5	4, 0	770, 0	泥質片岩	
タ	76	タ	17, 2	14, 3	3, 1	1070, 0	タ	
タ	77	タ	21, 9	15, 0	5, 0	1740, 0	タ	
A	78	石皿	(12, 5)	(15, 0)	3, 6	950, 0	玄武岩質溶岩	
B	79	タ	(14, 0)	(11, 5)	4, 2	750, 0	タ	被熱
タ	80	磨製石斧	(10, 6)	6, 2	3, 6	390, 0	安山岩	被熱・吸炭
タ	81	タ	(10, 0)	4, 6	2, 9	240, 0	タ	
タ	82	タ	(7, 0)	(5, 5)	2, 9	150, 0	タ	
遺物集中部	83	石錐	6, 2	5, 3	1, 1	タ		
B	84	タ	6, 6	4, 6	1, 0	50, 0	タ	
タ	85	タ	7, 5	4, 7	1, 2	70, 0	タ	
タ	86	タ	6, 9	6, 0	1, 5	100, 0	タ	
タ	87	タ	7, 5	6, 5	1, 3	110, 0	砂岩	

第VI章 まとめ

今回の調査では、縄文時代の集石1基・焼上2基・埋設土器1基・遺物集中部1か所を検出した。この他、多量の縄文土器が出土し、時期は縄文時代後期前葉を主体に中期から晩期に属するものであった。加曾利B式以降の土器の数量は極端に減少している。以下、気付いた点を概述してまとめとしたい。

(1)土器について

土器の主体は第4群が占めており、称名寺式から堀之内1、2式に比定できる。このうちとくに1類の磨消縄文が施された深鉢、3類の沈線が主体的に施される深鉢、そして5類の胴部に主文様が施される深鉢が数多く見られた。3類a種のうち、口縁部105~109と胴部128~131は、文様が屈曲的であること、口縁部上端が外研ぎ状になること、焼成が良く、胎土は堅く締まっていることなどの共通点から、同一の土器群として扱えるものであり、時期は称名寺式の末期に位置付けられよう。また、112~114は、口縁上端に沈線や刺突文による装飾が加えられることから堀之内1式に比定できるが、112、113の文様構成は先述した107、108と同一と見られることから、堀之内1式の初頭段階に位置付けられるものであろう。なお、110、111が3本単位の平行沈線であるが、器形・胎土・焼成は先述の称名寺式末期とした一群に類似していることから、堀之内1式の初頭段階に位置付けられるものであろう。このように、3類a種は称名寺式の末期から堀之内1式の初頭段階に比定できるものと考えられ、この土器群に3類d種のJ字状の沈線文を施した胴部が伴うのである。3類e種は、復元資料の104に見られるように、沈線によるU字・逆U字状の文様が特徴的な一群である。大半が破片であるため時期を特定しにくいが、口縁上端に沈線がめぐるもの(140)と、口縁上端が無文のもの(104、143)があることから堀之内1~2式にかけて含まれるものであろう。本種は、称名寺式の系統を引くいわゆる「下北原式」と呼ばれるものにあたる。

5類のうち縄文が施されるものでは、胴部の文様構成が少なくとも3種に分けられる。埋設土器に特徴的な渦巻と斜行する沈線の組み合わせからなる文様が全体に横方向に展開するものや、102のように数本単位の縱位沈線で文様が区切られているもの、そしてb種の頸部に磨消縄文がめぐるもの(103)である。

この他、晩期後半の資料が目を引いた。第9群2類とした土器は、沈線の施文手法等から浮線文系土器と呼ばれるものに類似する。とくに、328は黒色磨研の土器で、他に比べ異質な感を受けるものである。328の類例として山梨県金生遺跡2号配石出土資料があげられる。

文様が多種多様であるのにかかわらず、大半が破片で文様構成の全容が把握しにくかったことと、筆者の不勉強さから、本書で行った分類は煩雑かつ恣意的で、理解しにくいものになった感は否めない。本遺跡の位置する山梨県東端と周辺地域では近年、中谷遺跡・宮ヶ瀬遺跡群など縄文後期の資料が多数発掘された遺跡があり、称名寺式の末期から堀之内式段階の資料が蓄積されつつある。今後、こうした近隣の調査事例を踏まえて、さらに検討を重ねていく必要があろう。

(2)土偶について

土偶は、顔部と脚部の2点がB区東側から出土した。顔部は板状で内面に円形の剥落痕が見られることから仮面に想定される。また、脚部とした資料については、当初どのような器形になるものか判然としなかったが、これを太く安定した中空の土偶脚部とみれば、ハート形土偶のうち、いわゆる新町タイプと呼ばれるものに類似する。両者とも胎土は同一と見られ、出土地も近接することからも同一個体の可能性は指摘できよう。時期は堀之内2式と思われる。新町タイプの中心は長野県にあるといわれ、山梨県内では並崎市後田遺跡・大月市

大月遺跡に類例がある。

(3)土器の接合状況について

遺物包含層中の土器の接合関係を示したのが第43図である。大半は1m前後の距離をおいて小片同士が接合するものが多いが、103のように最大14mの接合距離をもつものもある。また、1個体の土器が1か所にまとまるもの（98、99、101、255）があり、完全な形には復元できないものの、復元実測可能な資料となるものである。255は一部が斜面下方に飛散しているが基本的には同じ状況でとらえられるものであろう。

時期的には中期末から後期にかけての土器に接合関係が多く見られ、晩期では遺物集中部内でわずかに認められる程度である。

(4)遺物集中部について

集中部からは上器・石器・礫・骨・炭化物が出土した。いずれも周囲に拡散しながら遺物包含層に連続しており、集中部の明瞭な線引きは困難であった。集中部出土の土器は、包含層中の土器と時期的に相違ではなく、縄文時代中期から晩期まで認められる。しかし主体は後期前葉から晩期後半に位置づけられ、集中部の形成・使用時期と一致するものであろう。土器は細片が多い。集中部内の土器片の重量比は、20g以下が全重量比の71%を占めており、周囲の比率30%と比べ、細片の割合が突出して多くなっている。

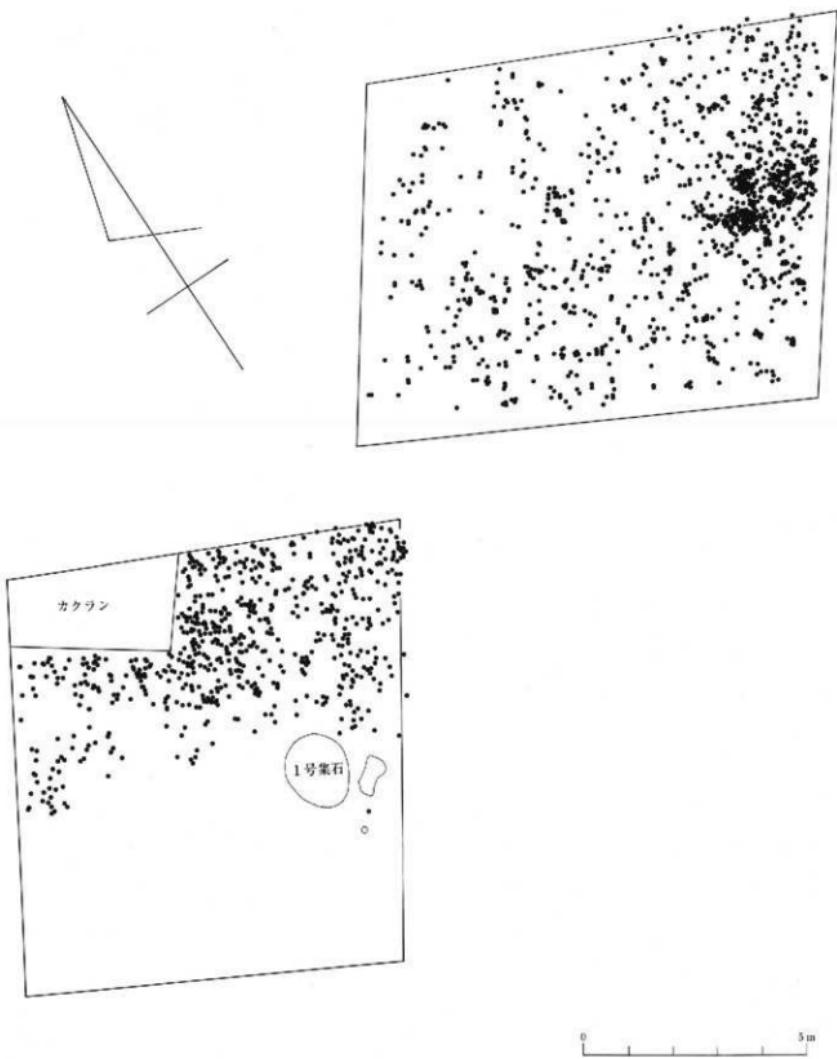
遺構の性格については、当初、浅い凹地を利用した土器等の廃棄場所と考えていたが、さらに検討の余地がありそうである。とくに、出土遺物の多くに被熱痕が認められ、焼土の出土と合わせ、「火」が本遺構の性格を考えるうえで重要な要素となっている。また、平石と磨石がセットで出土していることも本遺構の性格を考えるうえで示唆的である。

(5)遺物と遺構の分布について

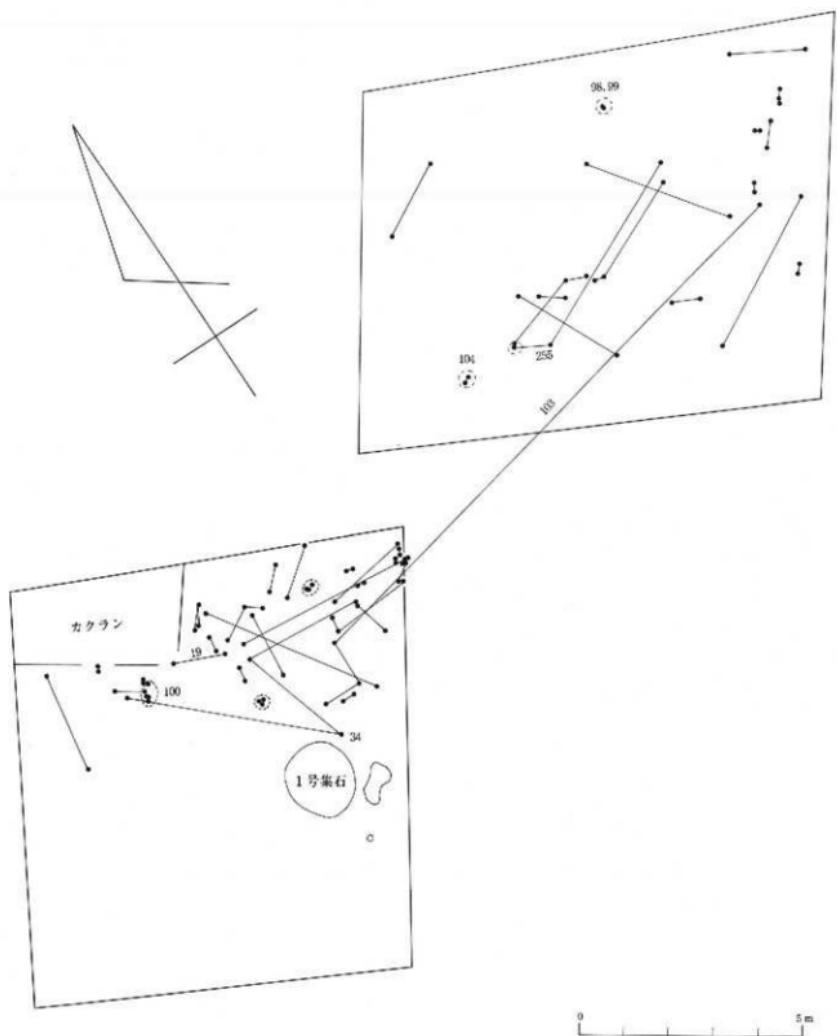
土器の分布では時期ごとに際だった相違を確認できる。すなわち、中期から後期中葉までの土器群は、A・B両区にまたがって広範囲に分布するが、後期後半から晩期の土器はB区遺物集中部内か、その外縁に偏在しており、後期後半の時期に遺物が斜面下方に分布域を狭めている様子が確認できる。時期別に分布が相違する現象は、遺構の分布とも一致するものと思われる。後期前葉では、遺物集中部が形成されながらも、1号集石・1号焼土・埋設土器のようにA・B両区にまたがって広範囲に分布しているのに対し、後期後半以降の遺構は遺物集中部の他に確認できなくなる。

本遺跡は縄文時代後期前葉を中心に、集石や焼土等の屋外施設が広範囲に散在する様子が確認できた。また多量に出土した土器や石器からは、調査区外におよび多くの遺構が見出せる可能性を示している。

基礎的な分析作業を十分行えなかったことによる、遺跡解釈の誤解が心配である。先学諸氏のご助言・ご批判を賜れば幸いである。



第42図 土器分布図



第43図 土器接合関係



第44図 石器分布図

用竹（殿村）遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

用竹（殿村）遺跡は、相模川水系鶴川上流部西岸の河岸段丘上に位置する。発掘調査により縄文時代後期～晩期の遺構・遺物が検出されている。基本土層は、下位から第Ⅳ層～第Ⅰ層に区分され、第Ⅱ層はさらにⅡ-1層とⅡ-2層に分けられる。縄文時代の遺物は、第Ⅱ層から出土しており、遺物の他に炭化物も確認できる。

本報告では、Ⅱ-2層から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定を実施し、第Ⅱ層の堆積した年代に関する資料を得る。また、炭化材の樹種同定を合わせて実施し、古植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、B地区Ⅱ-2層から出土した炭化材2点（試料番号3027, 3064）である。2点の炭化材は、50cmの間隔で出土している。

2. 方法

（1）放射性炭素年代測定

a) 前処理

炭：乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした）にシンチレイターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

c) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰返す計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

d) 計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。年代値は、2960y.B.P.と3030y.B.P.であった。また、樹種は2点とも落葉広葉樹のトネリコ属であった。解剖学的特徴などを以下に記す。

表1 炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定結果

試 料				樹 種	年代値	誤 差		Lab No.
地区	層位	番号	試料の質			+	-	
B 地区	II - 2 層	3027	炭化材	トネリコ属	2,960	460	440	PAL-134
		3064	炭化材	トネリコ属	3,030	200	200	PAL-135

注。(1)年代値：1,950年を基点とした値。

(2)誤差：測定誤差 2σ （測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で孔圈部は2～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

4. 考察

(1) 年代について

炭化材の年代値は、2960y.B.P.と3030y.B.P.であった。70年ほどの差があるが、測定誤差や樹齢の問題（東村、1990）等を考慮すれば、ほぼ同じ年代を示しているといえる。得られた年代値は、関東地方および東海地方の縄文時代後期～晩期の遺物と共に出土した木炭や貝の年代測定結果（キーリ・武藤、1984）に一致する。これは、炭化材が出土したII-2層から、縄文時代後期～晩期の遺物が出土していることとも調和的である。これらの結果から、炭化材は縄文時代後期～晩期の間に伐採・利用されたことが推定される。

(2) 古植生について

炭化材は2点ともトネリコ属であった。試料の距離が50cmであること等を考慮すると、本来は同一個体に由来している可能性がある。現在、日本に生育するトネリコ属は9種類に分類され、属としては湿地・谷斜面から尾根まで様々な環境に生育している。今回の結果から、縄文時代の

遺跡周辺の台地上や谷沿いトネリコ属が生育していた可能性がある。

試料は炭化していることから何らかの理由により火を受けたことは明らかである。周辺から遺物が大量に出土していることを考慮すれば、燃料材などの人間活動により炭化した可能性がある。

<引用文献>

東村武信（1990）改訂 考古学と物理化学、212p., 学生社。

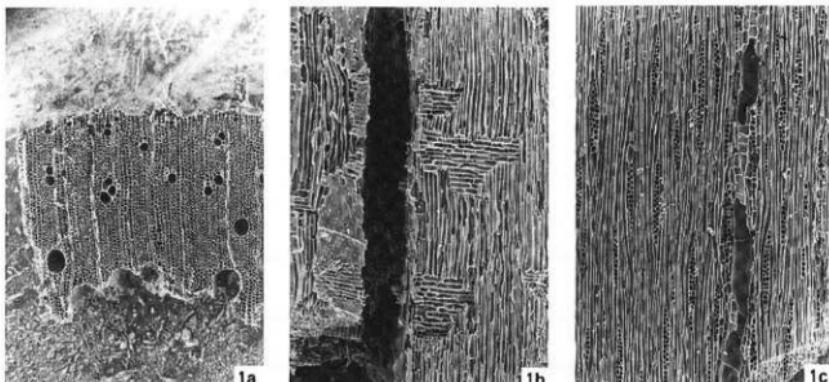
石河寛昭（1977）最新液体シンチレーション測定法、189p., 南山堂。

キーリ C. T. ・ 武藤康弘（1984）縄文時代の年代、加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」、p.246-275、雄山閣。

日本化学会編（1976）同位体、年代測定、「新実験化学講座10 宇宙地球科学」、p.337-353、丸善。

富樫茂子・松本英二（1983）ベンゼン-液体シンチレーションによる¹⁴C年代測定法、地質調査所月報、34, p.513-527。

図版1 炭化材



1. トネリコ属 (試料番号3064)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

用竹（殿村）遺跡出土の動物遺体

名古屋大学大学院人間情報学研究科 新美倫子

用竹（殿村）遺跡では遺物集中部から動物遺体が多数出土した。全ての資料はよく焼けており、種を同定できたのはシカのみであった。このうち45点の出土内容を表1に示し、主なものについて説明することにする。

シカは角の破片が11点と右側尺骨の破片・手根または足根骨がそれぞれ1点ずつ見られた。№2211の鹿角2点のうち1点は長さ15cmほどであり、表皮の状況から見て十分に成育した角である。もう1点は長さ4.3cmの破片であるが、表皮は剥落している。また、№2256と№2857はそれぞれ長さ7.3cmと2.7cmの破片で、これらも表皮が残存しており十分成長した角であった。№2888は長さ2.3cmの破片で表皮は剥がれ落ちている。これ以外の鹿角は全て長さ1~2cmの細かく割れた破片であった。他にシカ？の歯の破片が3点出土している。

種を決定できなかった資料としては、陸獣破片9点と焼骨片20点が出ている。陸獣破片は全て長さ1~2cmに割れており、大型の陸獣の四肢骨破片である。焼骨片としたものはいずれも細かく割れているために何の破片が判別できない資料であるが、大部分は陸獣の破片であろうと思われる。

表1 動物遺体出土内容

資料番号	種・部位・出土量
2211	鹿角破片 2 燃
2256	鹿角破片 1 燃
2496	鹿角破片 3 燃、焼骨片 11
2857	鹿角破片 1 燃
2864	シカ尺骨右破片 1 燃
2888	鹿角破片 1 燃
2893	シカ手根 or 足根骨 1 燃、焼骨片 3
3037	陸獣破片 1 燃
遺物集中部	鹿角破片 3 燃、シカ？歯破片 3 燃、陸獣破片 8 燃、焼骨片 6
計	45

図 版

図版1



遺跡遠景（北東から）

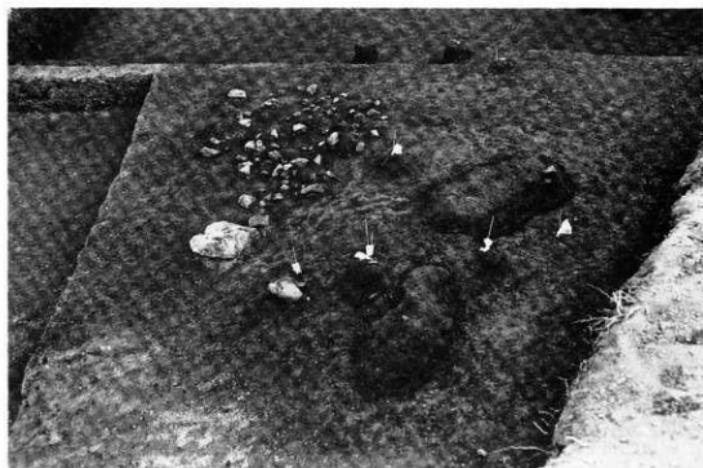


調査地近景（東から）

図版 2

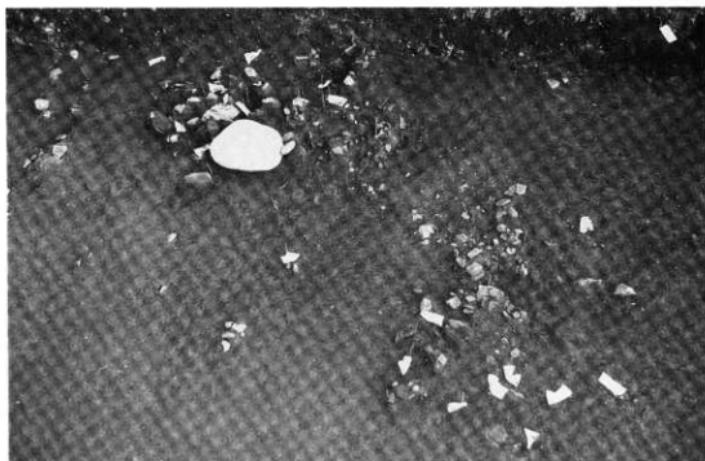


A区 遺物出土状況（西から）



1号集石・1号焼土確認状況（南から）

図版 3



B区 遺物集中部 検出状況（西から）



土器出土状況（B区 No.255）



土器出土状況（B区 No.98・99）



土器出土状況（A区 No.275）

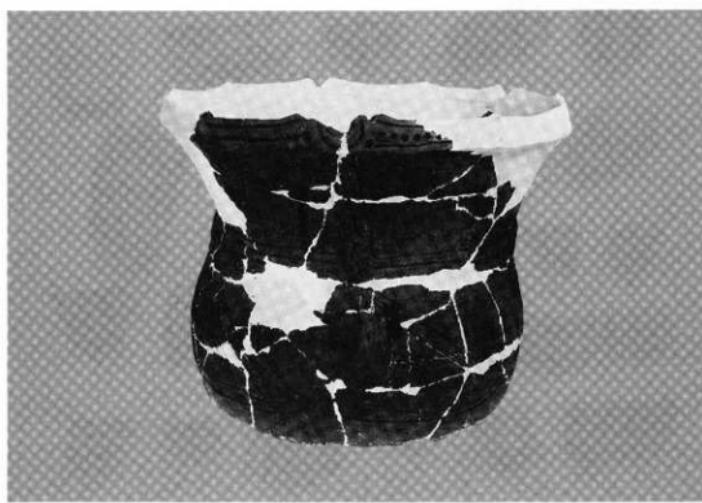


骨出土状況（B区 資料番号2211）

図版 4



埋設土器 検出状況



埋設土器

図版5



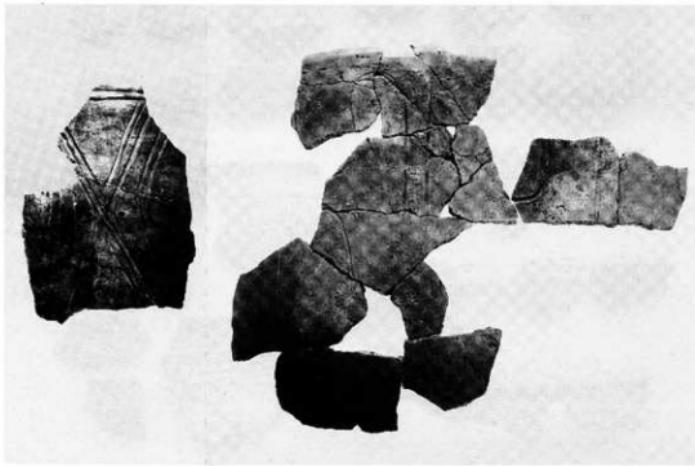
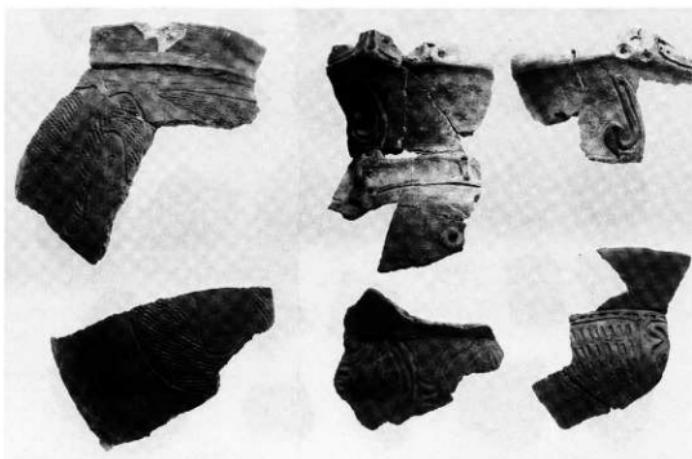
出土土器

図版 6



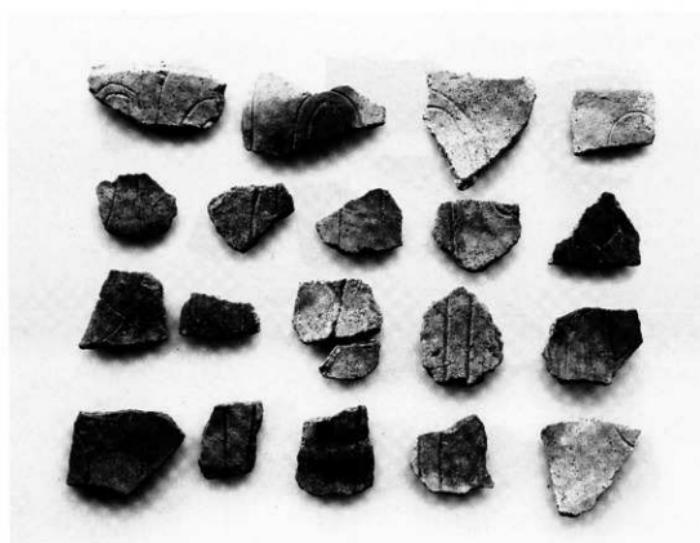
出土土器

図版 7



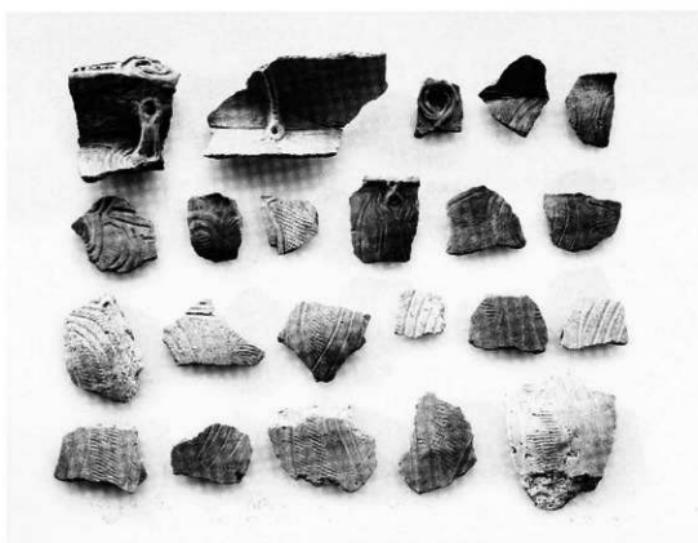
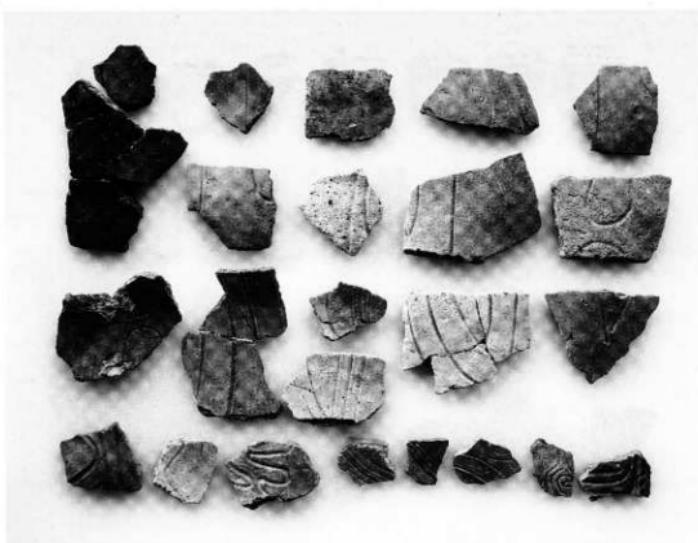
出土土器

図版 8



出土土器

図版 9

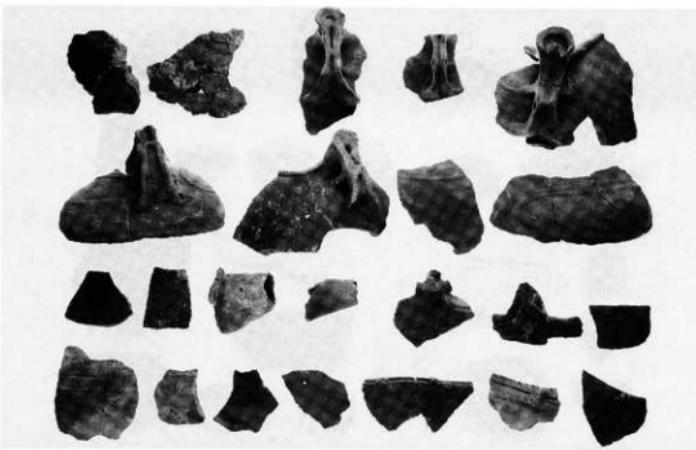
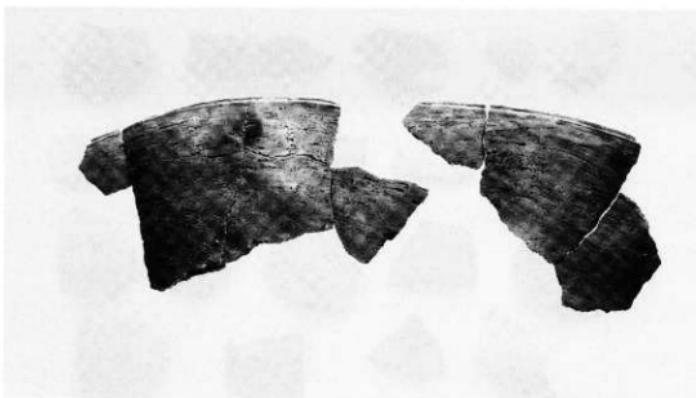


出土土器



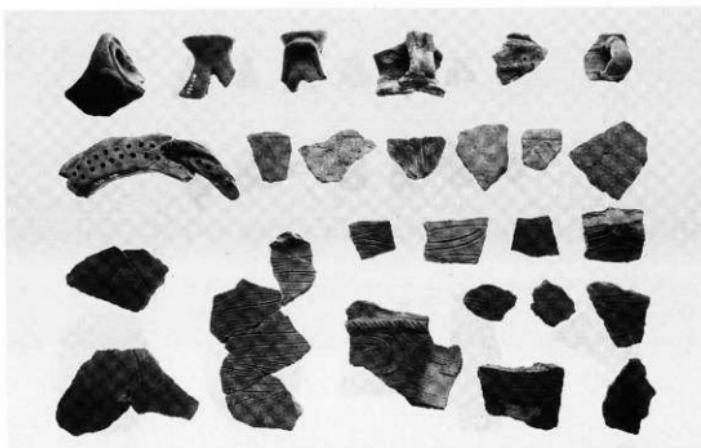
出土土器

図版11

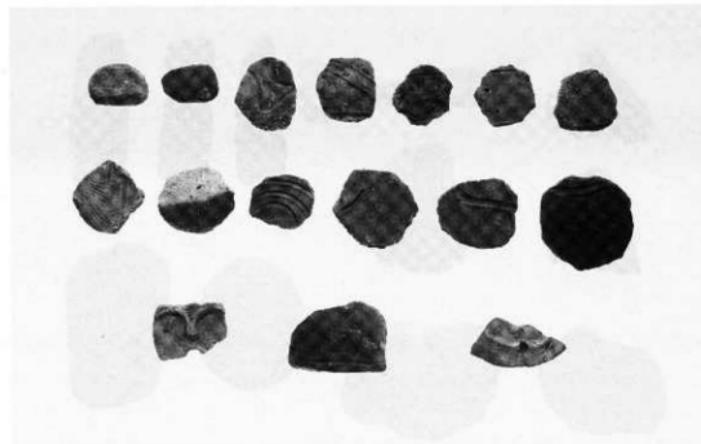


出土土器

図版12

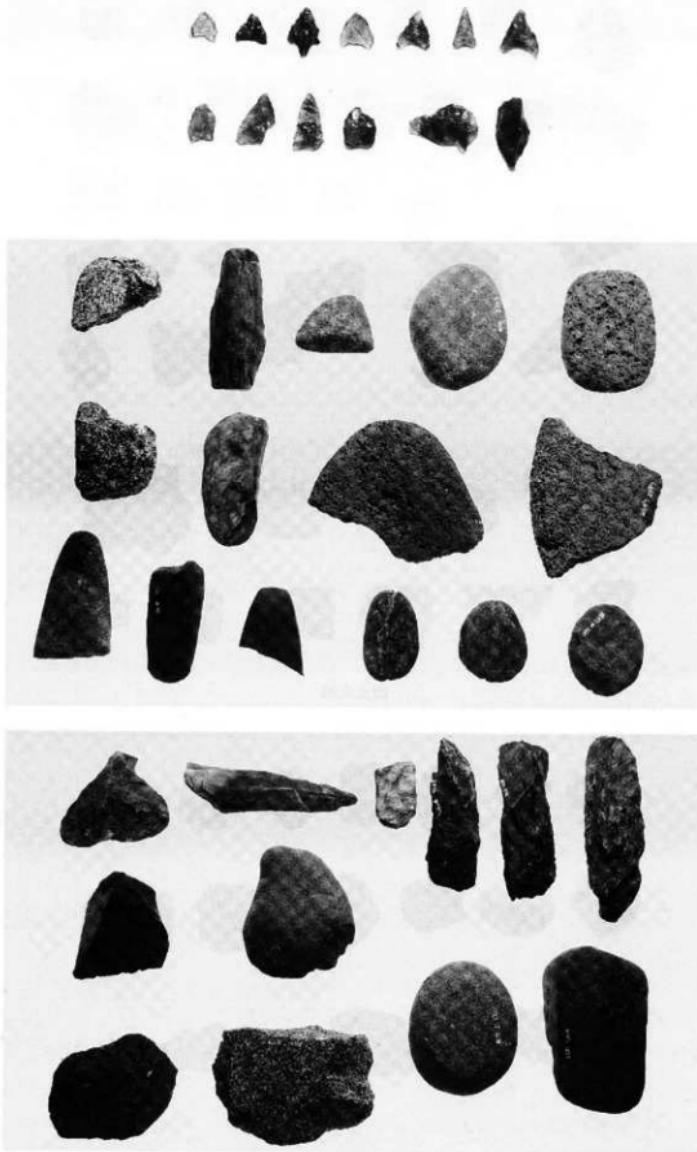


出土土器



出土土製品

図版13



出土石器

報告書概要

フリガナ	ヨウダケ（トノムラ）イセキ	
書名	用竹（殿村）遺跡	
副題	県道上野原五日市線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ	上野原町埋蔵文化財調査報告書 第8集	
著者名	小西直樹	
発行者	上野原町教育委員会	
編集機関	上野原町教育委員会	
住所・電話	〒409-0112 山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1 TEL0554-62-3111	
印刷所	サンニチ印刷	
発行日	平成10年（1998）3月31日	
用竹（殿村）遺跡	所在地	山梨県北都留郡上野原町柄原2848-2番地他
	25000分の1 地図名・位置・標高	上野原 北緯35°39'45" 東経139°05'25" 標高330m
概要	主な時代	縄文時代中期・後期・晚期
	主な遺構	集石・焼土・埋設土器・遺物集中部
	主な遺物	縄文式土器・土製品・石器
	特殊な遺構	多量の土器片や焼けた獸骨片などを伴う遺物集中部
	特殊な遺物	なし
	調査期間	平成7年（1995）11月27日～平成8年（1996）2月9日

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第8集

用竹（殿村）遺跡

平成10年（1998）3月31日発行

編集・発行 上野原町教育委員会

山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1

TEL 0554-62-3111

印刷 サンニチ印刷

